

お話 文芸思潮
— ヨーロッパ文化の源泉 —

中島 公子 著

青山社

お話 文芸思潮
— ヨーロッパ文化の源泉 —

中島 公子 著

青山社

は じ め に

この本は、最近の四年間にある私立大学の非人文系学部で行った『文芸思潮』という講義の内容を、お話風にまとめたものです。

最初にこの科目の担当を引き受けたとき、はたと困ったことがありました。私はフランス語授業を担当する教員で、これまで主としてフランス文学を自分の研究対象としてきましたので、この『文芸思潮』もフランスを中核としたヨーロッパ文芸を対象としてなら、なんとか講義を組み立てることができそうだったのですが、人文系でない自然科学や社会科学系の学生を相手にそのような講義をする場合、ある程度聴き手の側に、ヨーロッパ文化に関する基礎的な知識が必要だということに気づいたのです。

基礎知識といってもそんなに大げさなものではありません。ただ、欧米の文化の源泉となっている「ギリシア神話」とか、キリスト教、『聖書』といったものについて、ある程度の常識が備わっていないことには、近代や現代のどの国、どの民族の文化に対しても、「理解」はおろか、「興味」「関心」を持つことすら難しいのではないかと、という気がしてきたのです。そして、少なくとも私が接した学生諸君は、失礼ですが、ほとんどこうした事柄に関して無知といってもよいほど基礎的な知識を身につけていないように見受けられました。

ただしそれは学生に限ったことではありません。実をいうとこれは、半世紀近い年月をフランス語の教師として過ごした私自身の、苦い反省をこめて得た教訓でもあったのです。恥をしのんで一つ、例を取ってお話しましょう。

まだ二十代だった昔のことです。その頃は「泰西名画展」などと言われた西欧絵画の展覧会を観に美術館に行き、ある大きな絵のまえに私は立っていました。その絵は海に向かって走り出している牡牛を描いていました。その牡牛の背中に、金髪の美しい女のひとが横坐りに坐っていて、髪を風になびかせ、疾

駆する牛に体をゆすられながら、海へ海へと運ばれて行くのでした。珍しい図柄だと思い、横の貼り札に目をやりますと題名が出ていました——『牡牛に奪い去られるヨーロッパ』……！

狐に抓まれたような気がしました。これはいったい何のことなのか。ヨーロッパを美女になぞらえ、牡牛の背中に載せることで何らかの寓意をあらわしているのだろうか。そうすると牡牛は何の象徴なのだろう……？「下手の考え休むに似たり」と言うとおり、いくら首をひねっても回答の出てくるわけがありません。仕方なくそのまま絵のまえを離れましたが、落ち着かない気分だけが残りました。

それがかれこれ二十年も経って、「ギリシア神話」を読んでいるとき、ふっと謎が解けたのです。実はこの美女の名は「ヨーロッパ」ではなくて「エウロペ」といい、そして彼女を、牡牛に化けて誘惑し^{さら}攫って行ったのは誰あろう、「ギリシア神話」の数多い主人公たちのなかでももっとも有名かつ重要な大神ゼウスそのひとだったのです。ヨーロッパの人々は、さまざまな民族が共通に住み、自分たちの国土とする広大な大地に、美女エウロペの名を与えていたのです。このことは、欧米人のなかに根をおろしている「ギリシア神話」への愛着を雄弁に物語るものであると言えます。私はこのときつくづく、フランス語を人に教えるなんておこがましいほど、自分はヨーロッパについて無知だ、ということに気づいたのでした。

キリスト教やそのもととなる『聖書』についても、無知の程度にははなはだしいものがありました。「ギリシア神話」がギリシアの話だということは一般に知られていますが、イエス・キリストがどこの国の、どの民族の人かということについては、あまり明快に答えられない人が多いのではないのでしょうか。私自身かなり大きくなるまで、ルネッサンスの絵画やヨーロッパの町に数限りなく存在する教会の影響で、イエスも聖母マリアもイタリア人、少なくともヨーロッパ人の先祖だと思っていました。お恥ずかしい話です。

イエス・キリストは正真正銘のユダヤ人です。ではユダヤ人とはどういう人なののでしょうか。簡単に言えばユダヤ人というのはユダヤ教を信じた人々の子

孫です。キリスト教の聖典であるはずの「旧約聖書」は、内容的にはそのユダヤ教の歴史を書いたものなのです。キリスト教はユダヤ教のなかに生まれ、それを完成するものとして成立したからです。

そしてこのユダヤ・キリスト教の世界は、地理的には今もっとも世界の注目を集めている中近東の世界です。メソポタミア地方にはじまり、現に血なまぐさい紛争に明け暮れているパレスティナ地方がその中心です。このことを、しっかりと把握している人はどのくらいいるのでしょうか。キリスト教というのは、中東の片隅に生まれた小さな世界の物語を地球規模にひろげ、未来永劫にわたってあらゆる人類が自分の生のよりどころとすることの出来るものに作り変えた宗教です。そしてこの宗教とともにヨーロッパは誕生したのです。

20世紀が生んだ偉大な心理学者 C. G. ユング（1875－1961）に、「集団的無意識」の理論があります。人間の心の深層には、祖先の経験が蓄積されて共通の記憶を形作っている、という理論です。これによれば「ギリシア神話」や『聖書』は、欧米の人々にとっては学習による以前に、この集団的無意識として深く根をおろしている記憶だと言えましょう。東洋の叡智の言葉を借りれば「父母未生以前の」記憶とでもいうべきもの、常識以前の常識。正直言ってわたくしち日本人には、この深層心理への理解が欠けていると思います。

21世紀にはいって、世界は本当に狭くなりました。中東やアフリカで起こっていることがアメリカやヨーロッパ、そしてそのまま私たちアジアの人間の日常と密接に結びついていることを、誰しも感じないわけにはいかないでしょう。それらの出来事が示している意味を理解するためには、それらの出来事を生じさせている人々の心の深層にも、関心を持つことが必要ではないでしょうか。彼らのアイデンティティーの基盤をなしているものについて学ぶのは、良いことだと思います。

とはいえ、私はその分野の専門家ではありませんので、実をいうとこのような講義をする資格には欠けるのです。しかし、長年フランス語やフランス文学を通じて、ヨーロッパに拒否される悔しさのようなものに抗して格闘しているうち、いつのまにか私のなかに、自分なりに拵えあげてきた「ギリシア神話」「旧

はじめに

約・新約聖書」そして「ヨーロッパ」のイメージができていることにも気づかされました。そしてこのような自己流の文化理解をもとに、「最低このくらいは知っていたほうがいい」と思うことを、できるだけ易しくお話風に組み立てながら『文芸思潮』の講義をしてみましたところ、興味がなかったわけではないが、受験に振り回されてきた結果、こうした方面に関心に向ける機会がなかったという非人文系の学生諸君に、けっこう好評を博したのでした。

教職を離れる時期を迎えて私は、この自己流の講義を本にして残していくことを思い立ちました。もしかしたら私と同じような思いを持ちながら大学生や高校生に接しておられる先生がおられるかもしれない。この本を使ってヨーロッパ文化の源泉である「ギリシア神話」「旧・新約聖書」に対する興味と関心を引き出してくださることができるかもしれない、と考えたのです。

そんな夢がどこかで実現することを願っています。

2004年 3月

著 者

目 次

はじめに	i
I ギリシア神話の世界	1
第一章 オリュンポスの神々	3
◆ ギリシア神話と私たち 3	
◆ ギリシア神話の舞台 4	
◆ ゼウス以前 7	
◆ ゼウス体制の確立 11	
◆ オリュンポスの12神 12	
第二章 人間たち	29
◆ プロメティウスと人間 29	
◆ 英雄ヘラクレス 32	
◆ 王たち 38	
第三章 トロイア戦争	49
◆ トロイア 49	
◆ なぜ戦争が起こったか 51	
◆ トロイア・ギリシアの英雄たち 55	
◆ トロイア陥落まで 70	
◆ トロイアの女たち 77	
◇ キー・ワード「運命」について 80	
II 旧約聖書の世界	83
第一章 ギリシア神話の世界との違い	85

目 次

◆ 聖 書	85
◆ 神々と神	88
◆ 旧約聖書の風土	93
◆ 神・人間・選ばれた民	96
第二章 選ばれた民の歴史(1) 太祖たち	105
◆ アブラハム	105
◆ イサク	113
◆ ヤコブ	116
◆ ヨセフと12人の兄弟	122
第三章 選ばれた民の歴史(2) モーセとエジプト脱出	131
◆ エジプトの王子	131
◆ 燃える茂み	133
◆ アロンの杖	135
◆ 主の過越 ^{すぎこし}	140
◆ 海が割れる	142
◆ モーセと「十戒」	144
第四章 選ばれた民の歴史(3) ダビデとイスラエル王国	153
◆ カナン定住	153
◆ ^{さばきつかさ} 士 師 から王制へ	155
◆ ダビデの出現	158
◆ イスラエル王国とエルサレム	164
◆ ソロモン王と神殿	167
第五章 選ばれた民の歴史(4) 預言者の時代	173
◆ 滅亡への道	173
◆ 二国分裂	175
◆ 預言者の登場	177
◆ 北イスラエル王国の消滅	180
◆ イザヤ	184

◆	携帯用の「神」	188
◆	嘆きの預言者	191
◆	バビロンの捕囚	195
◆	エルサレムへの帰還とディアスポラ	200
第六章	選ばれた民の歴史(5) ヘレニズムとの出会い	205
◆	アレクサンドロス大帝	206
◆	『70人訳聖書』	208
◆	マカバイの乱	210
◆	伝道の書	215
◇	キー・ワード「契約」について	216
III	新約聖書の世界	219
第一章	新約聖書とは？	221
◆	旧約と新約	221
◆	「新約聖書」の内容	225
◆	「新約聖書」の背景	231
第二章	イエス・キリストの生涯(1) 誕生からエルサレム入城まで	245
◆	大工の子	245
◆	洗礼から12使徒の選定まで	251
◆	イエスの宣教	263
◆	エルサレム入城	286
第三章	イエス・キリストの生涯(2) 受難から昇天まで	289
◆	最後の宣教	289
◆	最後の晩餐	293
◆	ゲツセマネの園	297
◆	大祭司の訊問	300
◆	ピラトの訊問	305
◆	ゴルゴタの丘	310

目 次

◆ 復 活 315

◆ 昇 天 320

第四章 キリスト教の誕生323

◆ 聖霊降臨と布教の開始 323

◆ 迫害と殉教のはじまり 326

◆ サウロの回心 329

◆ 使徒たちの宣教 333

◆ イエス・キリストによってもたらされたもの 340

◇ キー・ワード「愛」について 354

あ と が き.....355

I ギリシア神話の世界

古代ギリシア人のとらえた世界



出所：『ギリシア・ローマ神話辞典』、大修館書店、P606

第一章 オリュンポスの神々

◆ ギリシア神話と私たち

「ギリシア神話」というと、どこか馴染みの少ない遠い世界の物語のように聞こえますが、それは大きな間違いです。私たちの周りには「ヨーロッパ」のように、ギリシア神話から名前を取ったものがたくさんあります。電気のことを「エレクトロン」と言うのは皆さん知っていますね。これは1600年イギリスの科学者ウィリアム・ギルバート（1540－1603）が発見した静電気の現象に対して、彼が与えた名前です。あとでお話するトロイア戦争のギリシア側の総大将アガメムノンの娘の名「エレクトラ」にちなんで、つけたのです。

エレクトラは父王をたいへん愛していました。だから生みの母ではあっても、戦争に行った夫を裏切って男と通じ、その男と謀って凱旋した夫を殺害した母親クリュタイムネストラをどうしても赦すことができませんでした。異国に逃れて成人した弟のオレストスが戻ってきたとき、姉は弟に命じてまず男を、それから母親を手にかけて、父の復讐を果たすのです。ドイツの作曲家リヒャルト・シュトラウス（1864－1949）には彼女を主人公にした同名のオペラがありますが、最終幕でエレクトラは復讐をとげたのを喜んで、倒れ死ぬまで踊りつづけます。琥珀を絹の布で擦りつづけて生じた美しい火花に、激しい気性と情熱の化身エレクトラの名を与えるとは、イギリスの科学者もロマンチストですね。

私がかけている眼鏡のフレームは「チタン」という金属を材料に使っています。金紅石からチタンが発見されたのは18世紀の終わり頃ということですが、

20世紀になってから、ジェット機やロケットにも使われる、流行の新合金となりました。このチタンも出所は「ギリシア神話」です。チタンのもととなった「ティタン族」の話はこの章にまもなく出てきますので、くわしい説明はそちらに譲りましょう。ここではそのあとに生まれた「巨人族」のことにちょっと触れておきます。

アメリカ大リーグ、そして日本の野球界を代表する「ジャイアンツ」というチームの名は、ただ単に「巨人すなわち大きな人」という意味ではありません。蛇の尾を持ち、髪と髭をのびし放題にした巨大な体躯の、そして怪力無双の、神と人間の合いの子のような者たちの名前「ギガンテス（巨人族）」を英語読みにしたのが「ジャイアンツ」で、これもルーツは「ギリシア神話」なのです。ついでに言うなら、コンピュータの記憶容量を示す「ギガ」という単位も、このギガンテスから出たものです。

このように見てくると、われわれ日本人の生活のなかにも、知らない間に「ギリシア神話」がはいりこみ、息づいていると思いませんか。

◆ ギリシア神話の舞台

それではこれらの神話はどこで生まれ、後世に伝えられたのでしょうか。いうまでもなく生まれたのは古代ギリシアです。いま私たちが読むことのできるもっとも古いものは、紀元前8世紀の後半に盲目の吟誦詩人ホメロス、それから少しくだってヘシオドスという詩人によって語られた叙事詩を、古代ギリシア人が文字にして書きとめてくれたものです。

しかしそれらの神話はこの二人の詩人が創作したものではなくて、もっと昔、それも数百年も前からギリシアの人々の間に語り継がれてきたものだったようです。神話の内容が、紀元前1550年頃から1100年頃にかけてギリシア地方に栄えたミュケネという青銅器時代の文明の痕跡を残していることから、それがわかるとされています。

幼い頃に読んだホメロスの詩『イリアス』からトロイアの実在を信じ、とう

とう小アジアの西海岸に沿ってその舞台となったヒサルリックの丘をつきとめて、紀元前1250年頃の戦争によって破壊されたと推定されるこのミュケネ時代の古代都市の遺跡を発掘したドイツの考古学者シュリーマン（1822－1890）の話は、皆さんも聞いたことがあるでしょう。

ミュケネからギリシアへと伝わった神話は、やがてもう一つの大文明であるローマを通過することによってさらに大きく広がっていきます。ここでちょっとローマのお話をした方がよいように思われます。

アドリア海をはさんでギリシアと対峙するイタリア半島で、紀元前750年頃、狼に育てられたレムス、ロムルスという捨て子の兄弟が、二つの丘をせっせと鋤で耕していました。二人はそこに一つの新しい町を建設しました。町の名をどうするかで兄弟は揉め、それぞれ丘にのぼって見た鳥の数の多い方が勝ちという勝負をしました。勝ったのは弟のロムルスの方でしたので、ローマという名がつくことになりました。面白くなかった兄は暴れて、弟に鋤で殺されてしまいました。

兄殺しのこの日、紀元前753年の4月21日、ローマは産声をあげたのです。しかしローマがのちに世界制覇をなしとげるあの強大なローマになって行くためには、この先、先住者エトルリアをはじめ、いろいろな民族との長い苦しい戦いの日々が続くことになります。これを勝ち抜いて征服につぐ征服をなしとげるには、なによりも民族の固い結束と愛国心が必要です。この時ローマの人々が考え出したのが、レムス、ロムルスはギリシア神話の神と英雄の末裔だ、という説でした。美の女神ヴィーナスの子であるトロイアの英雄アイネイアスがその先祖であり、彼の孫娘が軍神マルスとの間にもうけたのが双子の兄弟だということです。

ギリシアの神々の血統を引く民の誇り——それは、ローマは特別な町だという思いに通じます。この町はわれわれに偉大な使命を課すために神々の加護を受けて誕生したのだ、という思想がローマ人を支えて、ローマを世界の首都たらしめて行っただけです。それはローマという文明が出来上がっていく過程での、ギリシア文明が果たした役割の大きさを物語るものとも言えましょう。

つまりローマ人はギリシアをお手本にして自分の国を作って行ったので、もともとローマが持っていたものよりも、なんでもギリシアの方がすぐれていると考え、ギリシアの文化を完全に身につけることに夢中になったのです。ローマにもローマ固有の神話がなかったわけではないのですが、彼らはそれをほとんど忘れてしまうか、あるいはギリシア渡来の神話の一部と解釈することによって、ギリシア神話とはもともとローマ人が昔から信仰してきた神様たちの物語なのだ、と信じるようになりました。こうして「ギリシア神話」は、『ギリシア・ローマ神話』になっていきました。

ローマにはギリシア語とは違うラテン語と呼ばれる言葉がありました。これも文明化にともなって大きな発達をとげ、独自の文字を作り、ギリシアに劣らない壮麗な文化を生みしました。これが西欧諸言語および諸文化の母体となることは皆さんご存じの通りです。ラテン文化のなかでギリシアの神々はそれぞれラテン語の名前を持つようになり、神話はラテン語でも美しく語られるようになります。神話を扱った数多いラテン文学の作者の中から、ここで一人だけ名前をあげておきましょう。キリスト生誕のころに活躍した詩人オウィディウス(BC43－AD17)です。彼の『転身物語』(又は『変身物語』)は全編「神話」を物語る15巻の叙事詩で、『ギリシア・ローマ神話』の宝庫と言われるものです。この講義の内容も、多くこの『転身物語』を参考にしています。

いまみてきたことから、「ギリシア神話」の舞台がギリシアだけではないことは察せられるでしょう。もともとホメロスの『オデュッセイア』には主人公のオデュッセウスが世界の果てである「ヘラクレスの柱」を見るところが出てきますが、この柱は今日でいうスペインとアフリカ大陸の間、ジブラルタル海峡に立っています。エーゲ海、イオニア海、地中海、北は黒海、こうした海に沿って、「ギリシア神話」の舞台は実に広大な地域に広がっているのです。

◆ ゼウス以前

それでは、『ギリシア神話』のお話をまず世界のはじまりのところからはじめることにしましょう。

この世のあらゆるものに先立って、最初にあったのはカオス（混沌）でした。カオスは闇の巨大な淵のようなもので、その中ではあらゆるものが区切りも区別もなく混沌と入り混じっており、たえず方向のさだまらない風が吹いていると考えられています。そしてのちに神々が生まれたあとも、これは世界の果てに大きく口を開けているとされています。

この未分化の空間にまずエレボス（♂暗黒）とニュクス（♀夜）が生まれ、カオスから分離しました。これと前後してガイア（♀大地）とタルタロス（♂地獄）、そしてエロス（♂愛）という3人の神が生まれました。これらの神々ははじめから人間のように性別を持っています。このことは、今後にわたっても重要なことなので、神々がお話にはじめて登場するとき、上記のように生物記号で表していくことにします。

エロスという神は、男女を愛によって結びつける神です。この神によってエレボスとニュクスは結婚して2人の子供を生みました。アイテル（♂光）とヘメラ（♀昼）です。これで光と闇、昼と夜の区別ができたわけです。

ガイアは私たちが乗っている大地そのものを表すと同時に、これからすべての神の祖先にあたる神々を生んで行く、重要な女神（大地母神）です。まず彼女は単独でウラノス（♂天空）を生み、自分（大地）の上に高い山々を作り、それからポントス（♂海）を生みました。天と地、山と平地、海と陸地がここにできあがりました。

それからガイアは結婚しました。相手は自分の息子のウラノスです。この結婚によって生まれたのが例のチタンのもととなった「ティタン族」です。6人が男（♂）、6人が女（♀）、あわせて12人でした。

ところが、その後に生まれた6人の子供たちを見て、お父さんのウラノスは肝を潰してしまいました。はじめの3人はキュクロプス（♂丸目）と呼ばれる

巨人で、額のまんなか大きな丸い目をつくっつけています。あとの3人はヘカトンケイル（ひゃく腕）といって、それぞれ50ずつの頭と100本ずつの腕を持つ怪物だったのです。

自分が支配している天空にこんな気味の悪い怪物にごろごろされてはかなわないと思ったウラノスは、彼らを縛り上げて母親の胎内すなわち地の底に戻し、出てこれないようにしてしまいました。

怒ったのはガイアです。もともとウラノスが性交を迫って地面に覆いかぶさってくるのがうっとうしくて、あまり好きでなかったガイアは、ティタンたちを押し込められて、おなかが重くて苦しいうえに、怪物とはいえ可愛い息子たちをひどい目にあわせた身勝手な夫が憎らしくてたまらなくなりました。なんとか懲らしめてやらなくては、と思ったのです。そこでまず鋸のようなぎざぎざの刃のついた巨大な鎌を作り、それから男のティタンたちを集め、その鎌を見せてこう言いました。

「息子たち、お前たちの中に、この鎌を使い、私が教えるとおりにして、お父さんを懲らしめてくれる子はいないかしら。その子はお父さんに代わって、この世界の王となることができるのだけれど」

息子たちは鎌を見て恐れおののき、ぶるぶるふるえて尻込みするばかりでしたが、6人のうち最年少のクロノスだけが、ひとり母親のまえに進み出て、

「ぼくがやるよ、お母さん」

と言いました。

そこでガイアは事細かに計画をクロノスにうちあけ、息子は母の言いつけ通り、鎌を持って待ち合わせの場所に隠れました。

ウラノスは、そんなこととは露知らず、いつものように降りてきて、ガイアを抱擁しようと、大地に覆いかぶさりました。そこへ飛び出したクロノスが、父王の性器を、片手で掴みざま、もう一方の手にした鎌で刈り取ると、肩越しにポーンと後ろへ抛り投げたのです。

後ろは海でした。

肉塊はそのまま海面に浮かび、幾年月も漂っていました。そのうちこれを取

り囲んで、白く透明な泡がおびたしく生じてきます。そしてこの泡のなかから、ラテン名をウェヌス、英語ではヴィーナスと呼ばれる絶世の美女が誕生するのです。これこそ「ギリシア神話」の中心的存在、美と愛の女神アプロディテ（♀）に他なりません。彼女はさらに風神ゼピュロスの吹く風に運ばれて裸身のまま東へ東へと進み、地中海の東の端にあるキプロス島に上陸……これを出迎えて花の衣を着せるのは季節の女神ホラたち……ルネッサンスを代表するボッティチェリ（1445－1510）の名画『ヴィーナスの誕生』と『春』は、これを主題としたものです。

話をもとにもどしましょう。

母親の命令で父ウラノスに罰を与えたティタン族の末息子クロノスは、約束通り神々の王になりました。女のティタン族のひとりレイアと結婚して次々と子供をもうけましたが、クロノスはこれらの子供を生まれるそばから腹のなかに呑み込んでしまうのでした。どうしてそんなことをするのかというと、それはガイアやウラノスから聞かされた予言のせいだったのです。

「お前はお父さんのウラノスから王位を奪ったが、お前自身も息子から王位を奪われる運命にある」

と、そのように父母から聞かされていたのです。

だからクロノスは3人の女の子、2人の男の子を、生まれるとすぐ、レイアから奪って呑み込んでいました。ここでちょっと断わっておきますが、ギリシア神話の神様は死ぬということがないのです。ウラノスも傷つけられはしましたが、死んだわけではないし、ガイアの腹に押し込められた怪物たちも、まだちゃんと生きています。クロノスも危険人物であるわが子たちを殺してしまうわけにはいきませんので、仕方なく自分の腹のなかに納めてしまったのです。

そのうちレイアは6番目の子供を宿しました。

「この子だけはなんとか人並みに成長させたい」

と母親が考えたとしても、無理はないでしょう。彼女は自分の母親であり、姑であるガイアに相談しました。ガイアは言いました。

「よろしい。その子だけはクロノスに呑み込まれないようにしよう。そういう

運命になっているのだから。わたしの言う通りにしなさい」

月が満ちるとレイアは、ガイアの指示にしたがって、夜のうちにこっそりクレタ島へ行き、そこで玉のような男児を出産しました。そしてその子をガイアに預けると大急ぎでクロノスのもとへもどり、子供のかわりに大きな石に産着を着せて、自分の横に寝かせました。

朝になってクロノスがやってくると、「こんど生まれたあなたの子供よ」と言って、その石を渡します。クロノスは「ウン、今度の子は重いな」とかなんとか言いながら、すぐさまその石を一呑みにしてしまいました。

赤ん坊はクレタ島の山奥で、山羊の乳に養われて、すくすくと成長しました。若者となってからこっそりと父母のいるところへ戻り、知略に長けた女神メティスの助けを借りて、クロノスに吐き薬を飲ませることに成功します。

クロノスはまず最後に吞まされた石を吐き出しました。それから呑みこんだのとは逆の順番で、ポセイドン（♂）ハデス（♂）ヘラ（♀）デメテル（♀）ヘスティア（♀）と、5人の子供たちを次々と吐き出したのです。兄弟を救った末の弟はその時、輝くばかりの美青年となって目の前に立っていました。これこそ、「ギリシア神話」の世界の最高神ゼウスの若き日の姿です。予言は成就して父王クロノスは王宮から追放され、すごすごと立ち去っていきました。

この時吐き出された神々たちはゼウスの兄や姉たちですが、クロノスの腹から出たときに二度目の誕生をしたと考えて、ゼウスを長兄と仰ぐことに決めました。兄弟の順番も吐き出された順に生まれたということにし、もとは一番上の姉さんだったヘスティアが末の妹ということになりました。みな救い手のゼウスに感謝し、忠誠を誓ったのは言うまでもないことです。

ゼウスは彼らにそれぞれ役割をあたえて、支配の体制を固めました。ポセイドンには海の支配をまかせ、ハデスを地下の死者の国の王とします。ヘラはゼウスの妃となり、デメテルは農業を司り、ヘスティアはかまど竈すなわち火を守る神となりました。

しかし、これでゼウスの王座がゆるぎないものになったかというのと、そうは行きませんでした。クロノスに助けられたクロノスの兄や姉、その子供たちで

あるティタン一族は、一格下である甥たちの支配を肯んじることができず、クロノスを助けていま一度王の座につかせようとして、ゼウスに反抗します。ティタノマキア（ティタンたちとの戦い）ははじまるのです。

◆ ゼウス体制の確立

いや、「ティタン」は強かった。これは後世、並外れて大きいものとか、壮大な事業とかいったものを形容するときに使われる「ティタンのような」という言葉を生んだくらいですから。1912年北大西洋上で沈没した豪華客船「タイタニック号」は、この形容詞から命名されています。

だからゼウス側は苦戦を強いられました。

この時ゼウスは、ギリシアの北の端、隣国テッサリアとマケドニアとの間に聳^もえるオリュンボスの山の頂に、陣を構えました。そして自分に味方する神々をここに糾合してティタンに立ち向かったのです。しかし双方の力は伯仲し、どうしても一方の決定的な勝利にいたらないでいるうち、10年の年月が経ってしまいました。この期におよんでオリュンボス側に秘策を授けたのは、またしてもガイアでした。彼女はウラノスによってガイアの腹のなかに閉じ込められたままになっている怪物たちを解放して味方につけるよう、ゼウスにすすめたのです。

ゼウスはポセイドンとハデスを連れて地下に下り、キュプロクスたち、ヘカトンケイルたちのいましめを解いてやりました。怪物たちが喜んでオリュンボス側の戦列に加わったことは言うまでもありません。

キュプロクスは鍛冶屋でもあったので、武器をゼウスたちに献上しました。ゼウスには雷を、ポセイドンには穂先が三叉にわかれた鉾を、ハデスにはかぶると姿がみえなくなる兜を。

ヘカトンケイルは戦場へ出て、100本ずつの腕で大きな岩を、掴んでは投げ、掴んでは投げ、雨あられのように敵陣に落下させました。

これによって勝利はオリュンボス方に輝き、ティタンたちは捕らえられて、地

底の地獄タルタロスに押し込められました。絶対に逃げ出せないように、周囲を青銅の塙で囲み、ヘカトンケイルたちが番人としてそこに配属されました。

これでようやくゼウスの新体制は確立することになったのです。オリュンポスは神々の座所となり、ゼウスはその神々の王として世界に君臨することになりました。

しかしゼウスは、絶対君主ではありませんでしたが、かならずしも専制君主というわけではありませんでした。統治にあたって彼がとったのは、一種の内閣制度でした。

ポセイドンら兄弟に与えた役割については前に述べましたが、こうしてポセイドンは海、ハデスは冥界とそれぞれの領域を決めたら、その統治は彼らに一任して、細かいことにゼウスはタッチしません。ゼウス自身、天空という自分の領域をもっていて、そこは彼以外の誰にも侵されないようにしています。その意味ではゼウスも閣僚のひとりと言うことができます。

しかし権威ということになると問題は異なります。ゼウスはよく「金の秤を持つ」と言われますが、これは運命の決定権を持つという意味で、要するに神であろうが人間であろうが、すべての人事はゼウスによって決められる、ということなのです。ある王家の存亡、ある英雄の生死、神々の登用と身分の剥奪は、ゼウスの一存で決定されるのです。これは統治される側からすれば絶対的な権威と言えるでしょう。

そのようにして、神々に一定の自由を許しながらも人事権を一手に握ることによって、これをゆるやかに束ねるゼウスの見事な統率力のおかげで、オリュンポス体制は固まって行ったのでした。

◆ オリュンポスの12神

では、このゼウス内閣はどのような神々によって構成されたのでしょうか。みなさんは「オリュンポスの12神」という言葉をどこかで聞いたことがあるでしょう。そう、ゼウスを含む12人の神々がこの内閣のメンバーで、それらは全

部ゼウスの兄弟姉妹あるいは彼の子供たちなのです。会社にたとえれば同族会社です。以下にその名前を、わかりやすいようにラテン名と英語読みを添えて紹介しましょう。

ギリシア名	ラテン名	英語名
1 ゼウス♂	ユピテル	ジュピター
2 ヘラ♀	ユノ	ジュノー
3 ポセイドン♂	ネプトゥヌス	ネプチューン
4 ハデス♂	プルート	
5 ヘスティア♀	ウェスタ	ヴェスタ
6 デメテル♀	ケレス	
7 アテナ♀	ミネルヴァ	ミネルヴァ
8 アポロン♂	アポロン	アポロ
9 アルテミス♀	ディアナ	ダイアナ
10 アレス♂	マルス	マーズ
11 ヘパイストス♂	ウルカヌス	ヴァルカン
12 ヘルメス♂	メルクリウス	マーキュリー

このうち6番めのデメテルまではすでに紹介しました。みなゼウスの兄弟姉妹でした。つぎのアテナ以降はゼウスの子供たちです。

アテナ

先にヘラについて、役割はゼウスの妃と言いましたが、ゼウスにはヘラの前に妻がありました。最初の妻は若いゼウスに、クロノスに飲ませる吐き薬を教えたメティス（知恵、助言）というティタン族出身の女神です。この女神がゼウスの子を胎内に宿したとき、おじいさんのウラノスとおばあさんのガイアがゼウスにこう告げました——「気をつけなさい。メティスはいま女の子を腹に

もっているが、その子を産んだあとで2番目に生まれる子は男の子だよ。そしてその子はクロノスやお前がしたように、お前から王の座を奪い取ることになるだろう」と。

さあ大変です。考えた末にゼウスが思いついたのは、おなかにいる女の子ぐるみ、メティスを呑みこんでしまうことでした。前にも言ったように神様は死なないので、いったん生まれたものをどうこうするのはとても難しいのです。王座を脅かされないためには、その危険人物を生まれさせないのがもっとも賢明なやり方でしょう。メティスを呑みこんでしまえば、もう彼女と交わることはできません。したがって男の子が生まれてくることはなくなります。賢いメティスは納得尽くでゼウスに呑み込まれ、それ以降は腹のなかからゼウスに知恵を授け、取るべき行動の助言をするようになりました。

メティスのおなかのなかで育った胎児は無事に発育し、ゼウスのおなかのなかで娘に成長しました。ある日のこと、ゼウスは激しい頭痛に悩まされました。あまりの痛さに、頭を斧で叩き割ってくれ、と息子のヘパイストスに頼みます。ガンと一発、斧が脳天に振り下ろされますと、なんとそこから、黄金の甲冑に身を固めた美女が、勇ましい雄たけびをあげながら飛び出してきました。

これが戦いの神、技芸の神、そして知恵の神でもあるゼウスの^{まなむすめ}愛娘、処女神アテナの誕生のいきさつです。彼女は神話中さまざまところで中心的な役割を果たしますので、逸話も数え切れません。ここでは例の巨人族(ギガンテス)を滅ぼすとき、大活躍をしたということだけ、言っておきましょう。

東京はお茶の水にある「アテネ・フランセ」という外国語学校の看板には、兜をかぶったローマ風の人物の横顔がついています。その青年としか思えない凛々しい風貌にどことなく優しさが感じられるのはなぜなのか、なぜ兜をかぶっているのか、もうみなさんおわかりですね。

アポロン

アテナの次はアポロン（♂）です。太陽の神、美術と音楽と詩歌の神、未来

を知る神、穢れを清める神。美男中の美男。「あれはアポロンだ」と言えば、均整のとれた完璧な美青年だ、という意味になります。アポロンには双子の姉がいて、それがこの次にお話することになる月の女神アルテミスです。

アポロン、アルテミスを身ごもったのはレトといって、これもティタン族の流れをくむ女性でした。この時すでにゼウスには、ヘラという嫉妬のかたまりのような奥さんがいたので、ことは難しくなりました。

だいたいゼウスという神様はほんとうに女好きで、手当たりしだいと言ってもよいくらい、たえず浮気をしている、とんでもない殿御なのです。メティスからレトまでくるあいだに、掟の女神テミス(ティタン族)、水の女神エウリュノメと次々結婚しました。それから農業の神デメテル(ゼウスとヘラの妹)、記憶の女神ムネモシュネ(ティタン族)を愛人しています。その結果、テミスとの間には季節の女神ホラ(3人)、運命の女神モイラ(3人)が、エウリュノメとの間には美の女神カリス(3人)が生まれました。よくヨーロッパの都市の街角に3人の美女の像を見かけることがありますが、それはこれらの女神たちです。デメテルとの間に生まれたペルセポネ(♀)はすったもんだの末、ハデスに嫁いで黄泉の国の女王となりました。ムネモシュネから生まれたのは、9人のムサ(♀詩の女神、ラテン名ミューズ)です。一番上の姉さんカリオペはのちに人間と結婚して、堅琴を奏でる詩人オルペウス(♂ラテン名オルフェウス)を生むことになります。

しかし、こう見たところゼウスが手をつけた女神たちから生まれたのはみんな女神で、まだ男の子は生まれていませんね。オリュンボス内閣にはぜひ若手のすぐれた男性閣僚が必要でした。

こんどレトから生まれてくるのがアポロンとアルテミス、太陽と月を象徴するすばらしい男女の神だということは、みんなに知られていました。それが妃である自分ではなくて、愛人のレトから生まれてくるのだということに、ヘラは我慢がなりませんでした。女神はありとあらゆる手段を使ってこの出産を妨害します。レトがぐぐり抜けなければならなかった苦難は並大抵のものではありませんでした。

しかし、これに同情する女神たちもたくさんいました。彼女らの助力によって、海に漂う岩島の上でレトはまずアルテミスを、それからアポロンを産み落とすのです。

生まれてからも、アポロンの歩む道は必ずしも平坦ではありません。

彼は2度オリュポスを追放される憂き目にあっています。1度目はポセイドンと結託してゼウスに反抗しようとした時で、この企ては発覚して、罰として彼はトロイアに追放されたのです。

2度目はアポロンの息子で名医の誉れ高いアスクレピオスが、すでに死んだ人間まで生き返らせてやっているのにゼウスが腹を立て、アスクレピオスを雷で焼き殺してしまった時のことです。かわいい息子を殺されたアポロンは怒りましたが、ゼウスに刃向かうことはできないと観念していましたので、その代わりに、雷をゼウスに献上した例のキュプロクスたちを矢で射殺してしまいました。アポロンの武器は弓矢なのです。これは時として相手の目には見えないこともあり、疫病を流行らせることもできます。

キュプロクスを殺されたゼウスは非常に怒り、1年間人間の奴隷となって下界で暮らすことを罰として彼に課しました。ギリシアの隣国テッサリアで、牛飼いとして奴隷奉公をしたアポロンは、年期があけてオリュポスに戻りましたが、その時ゼウスは死んだアスクレピオスも神様として天に迎え入れてくれました。

アポロンのもっとも重要な役割は、神託を告げることです。それまで未来のことはガイアが一手に握ってみんなに伝えていたのですが、アポロンがデルポイに行き、ガイアの神託所を守る竜を退治して、ここを「アポロンの神託所」としてからは、ゼウスの意志を告げる場所となりました。そこにはピュティア(♀巫女)という人たちがいて、神殿の奥に据えられている3本脚の鍋のようなもののなかにはいり、地底から噴出してくるガスを吸って、神懸り状態になって神託を述べます。古代ギリシア人は、何か重大な決定をするときにはデルポイ詣でをして、アポロンにお伺いを立てるのが常でした。

アポロンのことはこれからたくさんお話に出てきますので、そろそろアル

テミスに行きましょう。

アルテミス

生まれたのは彼女の方が先ですから、アルテミスはアポロンのお姉さんです。これもアテナと同じ処女神です。彼女の武器はアポロンと同じ弓矢です。この二つのことから、この月の女神が純潔と狩猟の女神でもあることがわかるでしょう。パリの交通事故で突然死を遂げたイギリスのダイアナ元皇太子妃はこの女神の名を取ったのです。

ラテン名の「ディアナ」は、アポロンに対比して、女性の完璧な美貌の代名詞になっていますから、この女神がどれほど美しかったか、想像にあまりあるものがあります。一方でアルテミスは誇り高く、潔癖で、男の愛を受けつけないことでも知られています。アクタイオンという狩人が彼女の逆鱗に触れた話は、この女神の性格をよく物語っていると言えるでしょう。

狩の名人アクタイオンは山のなかで50頭の猟犬をつれて狩をしていました。走りまわるのにも疲れ、のどの渇きも癒したくて、水のあるところを探しているうち、人気のない静かな森の奥に、泉の湧き出る洞窟があるのに気づきました。涼しげな水音に誘われて、彼は洞窟のなかにはいって行きました。

そこにいたのがアルテミスでした。

彼女も日がな一日狩猟に明け暮れていましたので、疲れを癒すために、よくここを利用していたのです。飲むためだけでなく、水浴びをするために。だからその時彼女は一糸まとわぬ姿でした。

アクタイオンは、そんなこととは露ほども知らなかったのです。しかしはじめて見る女神のあまりの美しさに茫然として、言葉もなくその場に立ち尽くしてしまいました。

アルテミスは烈火のごとく怒りました。誰にも見せたことのない裸身を、こともあろうに人間に、水浴びの場に踏みこまれて曝すなんて、あつてはならないことだったのです。

「無礼者！」と女神は叫びました——「裸のアルテミスを見たと、みんなに吹聴できるものならやってごらん！」

そう言ってから彼女は泉の水を掬って狩人にあびせかけました。するとどうでしょう、若者の体はみるみる斑のある獣皮で覆われ、手足は毛の密集する鹿の肢となり、頭には高々と角が生え、1匹の鹿と変わってしまったのでした。アルタイオンは叫び声をあげてその場を逃げ出そうとしました。しかし女神はまだそれだけでは足りず、狩人が連れていた50頭の猟犬をけしかけて、鹿を食い殺させてしまったのです。

そんな恐ろしい神様ですが、自然に対してはこの上なく寛大です。彼女は自分が与える死以外のすべての死から動物を守る「野獣の女王」であり、野生の種を繁殖させる「森の女王」でもあります。かよわい動物の仔の命を守るため、人間の子供たちが巣から卵をとることを禁じ、腹に仔をやどしている雌の動物は殺してはならないと掟で定めています。こうしたけものが畏にかかったときは、「アルテミス様のために」と言って解き放ってやらなければなりません。だからけものたちはすべて女神になついています。白鳥はその手から餌をついばみ、女神は花と戯れながらライオンの子を愛撫するのです。未開の大自然、それが彼女の領域です。

人間が手をいれていない太古のままの自然を守るのと同じように、彼女は自分や少年少女の純潔を守ろうとしているのです。彼女がもっとも愛した若者は、継母のパイドラの横恋慕をしりぞけ、そのためにかえって父に誤解されて戦場に傷つき、死にいたる女嫌いのヒッポリュトスでしょう。そのほかには、兄のアポロン以外に彼女と仲良しだった男性の名はあまりみつかりません。星座になったオリオンに恋したという話もありますが、逆に彼に言い寄られたのをはねつけて殺したという説もあります。

アメリカの月面探検宇宙計画に「アポロ」の名が付けられたのは記憶に新しいところでしょう。人類がはじめて月世界に足を踏み入れようとした時、女神様のご機嫌を損じないように、お兄さんアポロンの名を掲げて行ったのは、うまいやり方だったかも知れませんね。でもこんなに地球や大気を汚し、自然の

生態系を破壊している最近の人類に、アルテミスが腹を立てていないかと思うと、宇宙旅行の行く末もなんだか心配になってきます。

アレス

ローマのお話をしたとき、レムスとロムルスは軍神マルスの落胤だと言いましたね。この神様はどちらかと言うとローマ名のマルスで有名になっているような気がします。戦争の神様だからでしょう。ゼウスと正妻ヘラの間にできた大事なひとり息子なのですから。

戦争の神様といえば、実は女神のアテナもそうなのです。このふたりは「戦」というものの持つ二つの側面を代表しているように見えます。

「戦」の最たるものは戦争ですが、スポーツやゲームにも通じる過去の「戦」には、わが国の古典『平家物語』に見られるような、命をかけて戦う勇士たちの勇気、華々しい武勲、人間の能力を十全に発揮することを賞賛する正の側面があることは否定できません。アテナはこれを代表する女神です。人間たちが手柄をたてるのを近くにいて援助し、知恵を授け、苦境を救う慈悲深い神様です。

しかし「戦」すなわち戦争は、古今東西、本質的には残酷な殺し合いと流血の場以外のなにものでもありません。どんなに美しく飾っても、この本質は覆い隠すことのできないものです。アレスはこの負の側面を代表する神です。戦闘のための戦闘を好み、戦場での殺戮と流血をそれ自体喜びとする残忍な神様です。彼はゼウスとヘラの正統な嫡子なのに、神々からも人間からも、どうもあまり愛されない気の毒なところのある神です。しかしそれは彼の粗暴な人柄(?)によるもので、「憎まれっ子、世にはばかる」という諺をつい連想してしまいます。

『レ・ミゼラブル』を書いたヴィクトル・ユゴー（1802－1885）は、その詩のなかで戦争を「マルスという名の殺戮」と呼びました。戦争の話の溢れているギリシア神話ですが、そこにはアテナのような建前の美しさを体現する優等生だけでなく、むき出しの野蛮さをあらわにした暴力的な神アレスがいること

によって、戦争の持つ非情さ、むごたらしさが十分に描き出されます。このことは、神話がわれわれに語りかけるものの深みを増す結果を生んでいるように私には思われます。

ヘパイストス

この神様は身障者です。足が曲がっていて歩行が困難なのです。おまけに、見た目も芳しくないということになっています。しかし彼は、五体満足的美男美女揃いのオリュンポスで、余人をもっては替え難い重要な地位をしめています。そして、こういったところが「ギリシア神話」のほんとうに面白いところなのですが、ついでにいえば、あの絶世の美女アプロディテを妻に迎えたのが、なんとこのヘパイストスなのです。どうしてこんなに重用されるのか。それは彼が科学技術の神様だからです。現代と同様、神々の時代もテクノロジーに対する期待は大きかったのですね。

しかしオリュンポスでの彼の役割をお話するまえに、まずその数奇に富んだ誕生のいきさつをお話しましょう。

ヘパイストスはヘラの子です。しかしゼウスの子ではなく、ヘラが他の誰かとの間にもうけた子供でもありませんでした。ヘラは、自分ひとりでこの子供を産んだのです。ゼウスがアテナを独力で産んだのに張り合っただことだった、と言いますが、アテナが生まれるとき、ゼウスの頭を斧で叩いたのはヘパイストスだということになってもありますから、これは時間的に成り立たない、変な話で、本当のところはよくわかりません。（「ギリシア神話」にはこういった時間的な矛盾がよく見られます。それは「神話」にさまざまなヴァージョンがあって、それが伝わる地方や神話にはいった時期によっていろいろな話が入り混じっているからです。）

とにかくヘラはひとりで男の子を産みました。生まれてきた子供は足が曲がっているうえに、可愛げのない、みてくれの悪い容貌をしていました。

「いやだわ。こんな出来損ないの子を産んだことがみんなに知られたら、物笑

いの種になってしまうわ。あたし、こんな子、要らないッ」

と言うと、ヘラは、生まれたばかりの赤ちゃんを天上から下界へ投げ落とししてしまったのです。ひどいお母さんですね。

落ちたところは、オケアノス(大洋神)が支配する広大な水の世界でした。オケアノスの妃テテュスとその娘エウリュノメが、墜落してくる赤ちゃんを水のなかで受けとめました。エウリュノメはゼウスと交わって3人の美の女神(カリス)たちを産んだ、人魚の姿で表される美しい水の女神です。

ふたりは赤ちゃんを海底の洞窟に運び、9年間やさしく育ててくれました。成長するにつれて、この子供が並外れて頭のよい、手先の器用な子であることがわかってきました。大洋に浮かぶ島々には火山が幾つもあります。『ゴッド・ファーザー』で知られるシチリア島のエトナ火山の火を使って、冶金の技術を彼は修得し、鑄造によって作れないものはないようになりました。

長ずるにおよんでおのれの出自を知ったヘパイストスは、自分を下界に突き落とした非道な母親を恨み、復讐したい、と思いました。しかし彼がしたのはいかにも技術者らしい復讐の仕方でした。1脚の椅子を考案し、そこにわからないようにある仕掛けを作り、黄金を使っていかにも神々の王妃が坐するのに相応しいように拵えあげ、これをお母さんのヘラに送り届けさせたのです。

捨てた息子がぶじに成長し、自分を恨むでもなく、すばらしい椅子を贈ってくれたことに、ヘラは喜んで、いそいそとその椅子に坐りました。すると、どうでしょう、目に見えない鎖がその体を縛り上げてしまい、下りられなくなってしまったではありませんか。

ヘラの悲鳴を聞きつけてみんな集まってきましたが、誰も手の施しようがありません。結局これを作ったヘパイストスをオリュンポスへ呼び寄せて、ヘラを椅子から自由にしてもらうしかありませんでした。これをきっかけとして、この身障者の神様はオリュンポスの神々の仲間入りをし、ゼウス内閣の科学技術担当大臣となったのです。しかもヘラを救ったご褒美に、アプロディテを妻に娶ることが許されたのですから、ゼウスがこの天才技術者をいかに高く評価したかがわかります。

しかし、この神様は他の神々と違って、官邸で大臣として執務するより、鍛冶場で火を相手に物を作るほうが性に合っていました。エトナや他の島々にある工房はそのままにしておき、例の丸目キューブロクスたちに手伝わせながら、自分も真っ黒になってさまざまな物を拵えました。ゼウスが投げつける雷、アルテミスやアポロンの弓矢、トロイア戦争の武将たちの鎧兜……みんな彼の製作によるものです。青銅でオリュンポスの宮殿を建造したときは、手伝わせるのに、自動人形すなわちロボットを作ったとも言われています。すごいですね。

アプロディテがヘパイストスと結婚したのは、ゼウスの言いつけによるものですが、エロスをお供に従えて、だれであろうと自分に恋させてしまうことのできるこの絶世の美女は、見た目ばかりで中身のない二枚目に多少うんざりしていたのかも知れません。そんなこともあって、ちょっとした気まぐれから天才身障児を夫に迎えてみたものの、すぐに飽きてしまいました。おまけに夫は工場に行きっきりで、ちっとも家に寄り付かないときは、恋愛をするために生まれたこの神様にとっては、浮気をしない方が無理と言ってもいいでしょう。

浮気の相手は、ボディー・ビルの元祖のような隆々たる筋骨を備えたアレスです。アレスは健脚でも知られています。まさにヘパイストスの対極のような神様です。夫が工場へでかけるたびにアプロディテはアレスを引き入れ、密通を重ねました。

これを、お日様が見ていました。お日様はヘリオス(♂)といって、毎朝4頭の輝く馬に曳かせた火の戦車に乗って東の空に現れ、空を渡り、夕方には馬たちを水浴びさせるために西のオケアノスに沈み、夜のうちにひとり舟で東へ戻るのです。このヘリオスが、図々しくもヘパイストスの寝床を使って姦通を犯しているアプロディテとアレスを天空から見て、義憤を感じ、これを夫に密告したのです。

ヘパイストスはお母さんの時と同じような復讐の手段を考えました。見えない金網を寝床の上に張り巡らし、ふたりがそこに横になると、自動的にスイッチが作動して金網が落ちてくるような装置を作ったのです。そして、

「ちょっとレムノス島へ行ってくるから」

と言って出かけて行きました。

そんなこととは知らないアレスは、チャンス到来とばかり、やってきて、アプロディテといっしょにベッドにはいりました。するとたちまち見えない金網が落ちてきて、ふたりは身動きできず、ベッドに金縛りの状態となりました。

出かけたはずのヘパイストスがここで姿を現し、大声で神々を呼び集めます。あられもない格好のふたりを笑いものにして鬱憤^{うっぶん}を晴らしたのです。

もっとも、ヘパイストス自身、アプロディテのことは、彼が夢中になった他の女神にくらべると、それほど強い執着はなかったようにも見えます。こんな目にあっても、性懲りもなく彼女とアレスの仲は続き、ふたりの男の子とひとりの女の子をもうけていますが、それに対して彼が嫉妬に燃えてどうこうした、という話は聞きません。

どうやら彼はアテナにお熱だったらしいのです。しかし恋したアテナからはこっぴどく拒絶されましたので、形だけの妻であっても、アプロディテと別れる気にはならなかったのかもしれませんが。こういう問題に関しても、妻の素行を正すという目的より、完璧な「姦通現場釘づけ装置」を開発することの方に、発明家ヘパイストスの関心は傾いていたように見えます。

ギリシア神話というのは、こんな風に神々のひとりひとりにくっきりとした性格を与えているので、まるでそのあたりに見かける人間を連想させるような、生き生きとしたイメージが生まれているところが面白いですね。

ヘルメス

さらに面白いのが、このヘルメスです。これは神様でありながら、泥棒で大嘘つきだからです。しかも、こういう詐欺師的才能をヘルメスに期待し、それを発揮させるために彼をオリュンポスに迎え入れたのは、ゼウスそのひとなのですから、奇想天外と言ってもいいでしょう。

ヘルメスはキュレネ山の奥に住む女神マイアとゼウスとの間に生まれました。生まれたその日から、回転の速い彼は、もう活動を開始しました。

まず、亀を捕まえてその甲羅に羊の腸を7本張り、7弦の竖琴を作りました。楽器ができると、それに合わせて母のマイアがゼウスに愛されたいきさつを語る歌を作詞作曲して歌いました。シンガー・ソング・ライターのはしりですね。歌いながら頭のなかで、これからする泥棒の計画を立てました。

計画が立ったところで、彼は竖琴をゆりかごのなかに隠し、旅に出ました。行く先はオリュンポス山の麓のピエリアというところでした。そこにはアポロンが飼っている牛たちのいる牧場があったのです。遠い道のりでしたので、そこに到着したときは夜でした。泥棒の活躍する時間帯になっていたわけです。

ヘルメスの目的はそこにいる50頭の牛を盗むことでした。

ここで、彼は頭を使いました。牛を後ろ向きにして、後ずさをさせながら牧場から連れ出したのです。自分は木の枝を編んだ履物をはいて、足跡が残らないようにして歩きました。こうして牛の残した足跡は牧場に入っていくものばかりとなり、出て行った形跡はどこにも残りませんでした。

それから彼は牛をピュロスというところまで連れて行って、2頭だけ殺し、これをオリュンポスの神々様にお供物として供えるために料理しました。料理には火が必要です。竈の神ヘスティアのところへ行ってもらってくるわけにいかない泥棒は、月桂樹の枝をキリのようにとがらせて、板の上で早く回転させ、火をおこしました。木を擦り合わせて火をおこす方法はこのときヘルメスによって発明されたのです。

残りの48頭は牛舎のなかに隠し、大急ぎでキュレネ山に戻ります。まだ夜は明けていませんでした。ヘルメスは洞窟にはいり、ゆりかごのなかで産着にくるまってぐっすり眠りました。

しばらくすると、かんかんになったアポロンが、牛を返せ、とやって来ました。ヘルメスの工作にちょっとは惑わされたものの、何でもお見通しの神託の神様アポロンです。じきにこの場所を突きとめて飛んで来たのです。

ヘルメスは言います——「牛泥棒なんて、大人のすることですよ。ぼくは昨日生まれたばかりなんですよ。まだ足の裏が柔らかくて、地面も踏めませんよ。昨日したことといえば、産湯を使わされて、産着を着せられて、ママのおっぱ

いを飲んで……ウン、あれはおいしかった……いい気持ちで眠った、ただそれだけのことです。誰にお訊ねになってもいい、アリバイは完璧です」

アポロンは怒り狂って、赤ん坊をゆりかごからつまみ出すと、

「いますぐ牛を隠したところに連れて行け。さもないとタルタロス（地獄）へ投げ込むぞ」

とわめきました。すると赤ん坊はその手のなかで、くしゃみをし、ついでに大きなおならもやってのけたので、アポロンはびっくりして赤ん坊を放り出してしまいました。赤ん坊は泣きもせず、起き上がって言いました。

「わからないお方ですねえ。わたしが盗んだ覚えもない牛をどうしても返せとおっしゃるなら、仕方がない、一緒にゼウス様のところへまいりましょう。そしてお裁きをつけて頂きましょう」

そう言うと、座着にくるまったまま、地面に触れたことのないはずの足で、すたすた歩きはじめました。アポロンは慌ててその後を追いました。そのときヘルメスはおむつと、それに亀の甲羅で作った竖琴も持って行きました。

オリュンポスでは、ゼウスが神々を集めて閼議を開いていました。そこへアポロンといっしょにやってきたヘルメスを見るなり、ゼウスは顔をほころばせ、

「やあ、来たな。みんなよく見ろ、アポロンが捕まえてきたあの獲物の面構えを。あれは伝令の役につけようと思って、わたしがマイアに産ませた子供だ。アポロンの牛を盗んだらしいが、盗み方もなかなか上手だったようだな、まだ牛がみつからないところを見ると」

と言ったのです。

「牛なんて、ぼく、まだ見たこともありませんよ。天地神明に誓って、濡れ衣です」

と、おむつを腕に抱えたまま、目をくるくる回し、眉を上げ下げながら、したり顔で述べ立てる、この嘘つき小僧のこっけいさに、並み居る神々は腹を抱えて笑い出しました。

「おい、おい、ヘルメス、お前が利巧なことはよくわかったよ。もういいから、アポロンに牛を返しておやり」

と、ゼウスも笑いながら言いました。

そこでヘルメスはアポロンをピュロスへ連れて行き、牛を返します。道すがら豎琴を弾いて聞かせたので、音楽好きのアポロンはすっかりこの楽器が気に入り、欲しくなりました。ヘルメスにそのことを言うと、

「いいですとも、お兄さん。お兄さんを騙したお詫びにこれはさしあげます。そのかわり、牛はぼくにまかせてくれませんか」

という返事でした。人のよいアポロンは承知して、さっきいったん取り戻した48頭の牛と、牛を追う鞭をこの腹違いの弟に与えました。これによって、ヘルメスは牧畜の神となり、音楽の方はすっかりアポロンにまかせることになったのです。

しかしアポロンは、オリュンポスにいたとき、自分がちょっと背を向けたときに、矢のはいった矢筒を弟がちょろまかしたのも知っていました。そのうちまた出来心を起こして、大事な弓矢に手をつけるようなことがないように、「今後、アポロンの物は決して盗まない」という誓いを立てさせることにし、ヘルメスは固くこれを約束しました。アポロンは喜んで、黄金でできた魔法の杖を弟に与え、以後このふたりは無二の親友になったのです。

ヘルメスは先に言ったように、牧畜の神、そしてゼウスの伝令使ですが、そのほかに、旅の神でもあり、黄泉の国への導き手でもあります。商売の神であることは言うまでもありませんが、弁論の神、また和解の神で、人間関係（たどしくは神々関係）、国際関係の調停者としても優れた能力を発揮します。伝令すなわちゼウスの使者ということは、多くの場合、彼が外交官として動いていることを意味するからです。

ギリシア古典喜劇の巨匠アリストファネス（BC405?－385?）によれば、この神様は、好戦的なオリュンポスの閣僚中唯ひとり、戦争という暴力を忌み嫌う平和論者です。戦争は言論の否定であり、商業を衰微させるものだからです。儲けの神であるヘルメスが容認できない唯一の儲け、それは戦争による儲け、すなわち武器売買なのです。「死の商人」たち、槍や盾の職人や商人が、戦争が起こって商売が繁盛するように願うと、ヘルメスは怒って、彼らを盗賊に襲わせ

ます。アレスの対極に位置するこの神は、いつも戦争の犠牲者となる運命にある人間たちに、希望を与える存在と言えるのではないのでしょうか。

さあ、これでオリュンポスの12神のお話はおしまいです。ただひとつだけ、ここにあげた12人の神々のうち、ハデスは地下の冥府にいて閑議に加われないので、彼をのぞいて、そのかわりにアプロディテを加える数え方もあり、多くの神話がこれに拠っていることを付け加えておきましょう。

第二章 人間たち

◆ プロメティウスと人間

神々の話をお聴きになったみなさんのなかに、こんな疑問を持った方はいらっしゃいませんか——「神様というけれど、ギリシア神話の神々は人間にそっくりじゃないか。肉体があつて、知性も感情もあつて、性別もあつて、しかも良いことばかりではなく、悪いことも平気です……いったいどこが人間と違うのだろう」。

もっともな疑問です。ゼウスをはじめ、オリュンポスの神々は、誰ひとりとして、人間そっくりでないものはありません。長所だけでなく欠点までしっかりと備えた、人間の典型のような人々、いや神々です。人間とどこが違うのか、それはとても重要な質問なのです。

答は簡単明瞭：人間は死ぬ、神は死なない、ただこれだけです。

神々は、遺伝子自体に不老不死の情報が組み込まれているだけでなく、「アムブロシア」という食べ物を食べているので、死なないのです。「アムブロシア ambrosia」は「プロトス brotos (死すべき)」という形容詞に否定の接頭辞 <a-> を付けた言葉から派生したのですが、これと同じ語源の「プロトイ Brotoi (死すべき者)」が、「人間」を表すギリシア語です。

神々の世界に元来人間はいませんでした。これを作ったのは、ゼウスと従兄弟の関係にあたるティタン族のプロメティウスでした。

彼の弟のエピメテウスが動物を作ったあとで、粘土を捏ね、神々に似せて人間を作ったのです。「不死」という神の本質的特長だけは受け継がせるわけにい

かなかったけれど、直立歩行をはじめとして心理的にも肉体的にも、能力的にも神々そっくりの生き物が「人間」でした。

作られた当初、人類は男性のみでした。女性を造ることを決めたのはゼウスですが、これはプロメティウスが人間にさまざまな特権を与えるのをゼウスが快く思わず、人類を災いで満たそうとして立てた戦略に基づくものでした。命令をうけてヘパイストスが拵えあげた人類最初の女性はパンドラと言います。

エピメテウスと結婚したあと、彼女は、決して開けてはならない、とプロメティウスから言いわたされていた、ゼウスの贈り物である小箱の蓋を、好奇心にかられて開けてしまいます。悲しみ、災い、病氣、争い、苦悩……これまで箱に閉じ込められていた人間にとっての諸悪は、このとき世界に飛び散って行ったのです。

慌ててパンドラが蓋を閉めたとき、箱の底には「希望」しか残りませんでした。解き放たれた不幸の数々をせめて和らげ、慰めるために、わたしも箱から出してほしい、と「希望」の霊が言いましたので、プロメティウスがこれも箱から出してやりました。

プロメティウスはこのように、ゼウス体制に属さない、アウトサイダーの神様です。はっきり敵対するというわけではありませんが、ゼウスの専横ぶりを批判し、その過酷な仕打ちからたえず人間をかばい、保護することによって、この神はしばしばゼウスの怒りを買うことになるのでした。

なかでも大きな出来事は、人類が火を手に入れるようになったいきさつと、それにつづくプロメティウスの受難です。

ある時プロメティウスが下界を眺めていますと、人間たちの暮らしが目にはいりました。その頃すでに天上ではオリュンポス体制がととのい、秩序ある日常が始まっていましたが、人間たちはまだまことに原始的な、動物と変わらない状態にとどまっていました。それは「火」を使うことをまだ人間が知らなかったからです。

これもゼウスの判断による政策でした。人間に対してきびしいゼウスは、生活が便利になると人間は働かなくなるのではないかと、また火を与えると、彼ら

は神々に対抗し、ひいては神々にとって代ろうとするのではないかと恐れたのでした。

太陽からか、それともヘパイストスの鍛冶場からか、プロメティウスは火を盗み、植物の茎を筒にして、そのなかに入れて人間のところに運びました。そして、火の使い方を伝授したのです。このとき農耕や航海の方法も伝えられたとされています。人間は自分の力で生活をより高度なものにすることができるようになりました。文明化された社会を持つようになったために、ここで人間は他の動物と決定的に袂をわかったのです。

夜の地上に、あかあかと灯る無数のともし火を見たゼウスは激怒しました。プロメティウスを捕らえ、人里遠く離れた岩山の高みにくくりつけるよう命じました。頑丈な手枷足枷を嵌めさせて岩壁に固定する作業を命じられたのはまたしてもヘパイストスです。あまり気の進まない仕事でしたが、政治アパシーの技術屋は権力者の意のままに動きます。

くくりつけられたプロメティウスめがけて、大鷲が飛んでくる……脇腹を食い破って肝臓をついばむ……これがゼウスの課した刑罰です。縛られているプロメティウスにはどうすることもできません。一日中拷問がつづいて、夜、大鷲が去って行くと、ようやく眠りにつくことはできますが、あくる日になると、また大鷲はやってきて、拷問が再開します。悲しいことに神は不死身ですから、食い尽くされた肝臓も夜のうちに再生してしまうのです。終わることのない苦痛にさいなまれて、どれほど彼は神であるわが身を呪ったことでしょう。

しかしこの場を通りかかって同情の涙を流してくれるオケアノスの娘たちに、プロメティウスは言っています——「わたしの過ちはみずから意図したものだ、それは否定しない」。

そして自分は人間に最善のものを与えたがためにこの憂き目にあった、と語り、「何をお与えになったのですか」と聞かれて、

「火、そして希望」

と答えています。このふたつのものは、太古から今日にいたるまで人間の生き方を導いてきたものといえないでしょうか。それが人間を幸福にしたことは

まぎれもない事実ですが、反面、これによって^{もたら}される不幸についても、われわれは決して鈍感であってはならないと思います。

「火」すなわちエネルギーの重要さは、ついに人間をして原子力を獲得させるまでにいたりしました。そしてそれがどのような惨禍^{もたら}すものであったかは、世界中の誰よりも日本人がよく知っているところです。

「希望」について言えば、これは未来を予知できない、という人間の条件そのものから生じるものであることを忘れてはならないと思います。だからこそ、災いの詰まったパンドラの箱のなかに、「希望」もまた位置を占めていたのです。科学が進歩し、人間の能力がいかに向上しても、まだ私たちはこの条件を克服することはできずにいます。希望を現実と取り違える愚かしさは、あるときは人を慰めますが、あるときは人を傷つけ、大きな実害をもたらす場合もあります。人間の限界を謙虚に認めること……人類の父であり、恩人であるプロメティウスが味わった想像を絶する苦痛は、そのことをわれわれに教えようとしているのではないのでしょうか。

プロメティウスは、やがて英雄ヘラクレスによってこの責め苦から解放され、ゼウスとも和解してオリュポスに戻りました。

ギリシア悲劇3大詩人の最初にあげられるアイスキュロス（BC525 - 456）の『縛られるプロメティウス』と『解放されるプロメティウス』は、この受難の一部始終を伝えて多くの文芸作品の基となったものです。解放のいきさつは、またこの古典を踏まえて、ヘラクレスについてお話す次の項目のなかで述べることにいたしましょう。

◆ 英雄ヘラクレス

ギリシア神話に出てくる人間のうち最大の英雄といってもよい、この人物についてお話すまえに、まずこの「英雄」という言葉の意味を明らかにしておく必要があります。

え？ 英雄は英雄でしょう？ わかってますよ、と言われそうですが、たし

かにこの言葉には、古代ギリシアにおいても、近代におけるのと同じ「非凡な才能や並外れた勇気の持ち主」、「他の人にはできない偉業を成し遂げた者」、「物語の中心人物」といった意味が備わっていたことは確かです。しかし、それよりももっと重要な意味がありました。

古代ギリシアの哲学者プラトン(BC428－348)はその対話集のなかで、ソクラテス(BC469－399)の言葉として英雄(ヘロス heros)を「神と人間の女、あるいは人間の男と女神の間に生まれた存在」と定義しています。「神話」の宝庫を残した詩人ヘシオドスは、英雄のことを「半神」とも言っています。要するに父母のどちらかが神でないただの人間に対してはこの言葉は使われないのです。

ヘラクレスは、人間の女アルクメネから生まれました。だから父親が神様でないと英雄とは呼ばれないはずで、事実最高神ゼウスがその父親なのですが、ちょっとこのあたり、事情が込み入っています。

アルクメネは従兄弟のアンピュトリオンという若者と婚約していました。その婚約者が戦争に行っているすきに、アンピュトリオンになりすましたゼウスが凱旋してきて、アルクメネと結婚してしまったのです。嘘つき、泥棒の才能はどうやら息子のヘルメス以上ようです。

翌日、実際に凱旋してきたアンピュトリオンは、妻の様子がおかしいことに気づきました。ようやく結婚できたのに、あまり感激している様子がないうえに、戦争の話をするとうるさ顔をして、

「そのお話はもう昨夜うかがったじゃありませんか」

と言うのです。

これはおかしい、もし彼女が夢を見ているのであれば、誰かわたしのかわりに昨夜彼女を抱いた者がいるのだ、と考えると、新郎は気が気でなくなりました。

思いあまって彼はテイレシアスという予言者のところに相談に行きます。この盲目の老人は、ゼウスのしたことをすっかり彼に話してやりました。アンピュトリオンはショックを受けて、それからはもう妻には触れないようになりまし

た。しかしそのとき早くもアルクメネは胎内に、ゼウスの子と、アンピュトリオンの子をふたりながら宿していたのです。

ヘラクレスの生まれる日になると、ゼウスは喜びをかくしきれず、みんなに吹聴しました。

「いいか、よく聴け。これから生まれようとしている、私の血を引く人間の子は、やがて近隣諸国からも王と仰がれるようになるのだ」

これを聴いて妨害することを考えたのが、お妃のヘラです。ヘラは自分以外の、まして人間の女がゼウスの子を産むことには耐えられません。そのうえ、こんど生まれるヘラクレスがどれほどすぐれた能力に恵まれているか、察しがつくので、ヘラの嫉妬はますます掻きたてられたのです。

まずこのゼウスの予言をヘラクレス以外の別の子供のうえに成就させるように策謀しました。お産の女神を下界に派遣してヘラクレスの出産をおくらせる一方、ゼウスの「血を引いている」ことは確かだが、子ではない、エウリュステウスという子供を、その日のうちに生まれさせてしまったのです。

そればかりではありません。アルクメネがふたりの子供を産み落としてまだ間もないころ、ヘラクレスと弟のイピクレスが寝かされている部屋に毒蛇を2匹送り込みました。もちろんヘラクレスの命を絶つためです。

弟のイピクレスが怯えて火のついたように泣き出す一方で、ヘラクレスは赤ん坊のくせに、両手に一匹ずつ、平然と蛇を掴み、難なくひねりつぶしてしまいました。

泣き声を聞きつけて駆けつけたアンピュトリオンは、このとき、ふたりの赤ん坊のうち、どちらが自分の子で、どちらがゼウスの子か、はっきりわかりました。

やがてヘラクレスは堂々たる体躯の、力溢れる若者に成長し、行く先々で手柄を立て、いろいろな王に見込まれては娘を娶わせられ、大勢の子供をもうけました。

しかし、順風満帆の人生をヘラが彼に許すはずがありません。ずるをして先に生まれてしまったエウリュステウス王の命令、という形で、12の無理難題を

ヘラクレスに押し付けたのです。

- 1 ネメアのライオン退治
- 2 レルネのヒュドラ退治
- 3 エリュマントスの猪の捕獲
- 4 ケリュネイアの鹿の捕獲
- 5 ステュムパリデスの怪鳥退治
- 6 アウゲイアスの家畜小屋の掃除
- 7 クレタの牡牛の捕獲
- 8 ディオメデスの牝馬の捕獲
- 9 アマゾンの女王ヒッポリュテの帯の奪取
- 10 ゲリュオンの牛の群の捕獲
- 11 ヘスペリデスの園の林檎摘み
- 12 怪物犬ケルベロスの冥府からの連行

「ヘラクレスの12の難行」として知られるこれらの仕事は、どれも多くの怪物や怪獣に邪魔されて、人間の力では到底成し遂げることのできないような大仕事でした。これらを英雄はほとんど他人の助けを借りずに、独力で成し遂げて行きます。そのためには力だけでなく頭も大いに使います。またこれらの仕事の場所は地の果てまで広がっており——ジブラルタル海峡にヘラクレスの柱を立てるのは10番目の難行のとき——最後の難行にいたっては、まだ誰も人間として戻ってきたことのない死者の国からの生還を果たさなければならないのですから、ほんとうに難行苦行の連続でした。時間の都合ですべてをご紹介しますわけに行かないので、ここでは、2番目のヒュドラ退治と11番目の林檎のお話をしたいと思います。

ヒュドラというのは沼に住む猛毒を持った水蛇で、真ん中に不死身の頭がある9つの頭を持ち、不死身でない頭も切られるそばから2個ずつ再生することになっていました。

これを退治するため、ヘラクレスは馬に引かれる戦車に乗り、弟イピオラス

の息子イオラオスを御者として連れて行きました。

まず火矢を放ってヒュドラを水のなかから追い出し、捕まえようとしたところ、ヒュドラは彼の足にからみついてきました。そのうえヘラがよこした大きな蟹がはさみで足をはさんでヒュドラを応援します。これはやっとなぐり潰しましたが、ヒュドラの方は、切るそばから新しい頭が生えてきて、けりがつきません。

そこへ甥のイピオラスが加勢に出ました。近くの森に火をつけ、そこから燃える木の枝を持ってきては、ヘラクレスが頭を切り落とした後の傷口を焼いて、新しい頭の再生を防いだのでした。

これによって、8つの頭を次々と始末したあと、最後の不死身の頭を切り落とすと、それを勇士は地中に埋め、そのうえに巨大な石を置いて押さえにしました。それから胴体を裂いて、その内臓の毒に、持っていた矢の矢尻を浸しました。これによって、ヘラクレスの矢はどんな敵でもたちどころに倒せる毒矢となりました。

さて、ヘラクレスがこのことをエウリュステウス王に報告すると、意地悪なエウリュステウスは、ヘラクレスがイオラオスに手伝わせたのはルール違反だ、として、これを「難行」に数えないと言い出しました。もう一つ、6番目の「アウゲイアスの家畜小屋」を掃除したときも、ヘラクレスが家畜小屋の持ち主に報酬を求めたことを理由に、「難行」にカウントすることを拒みました。もともとの「難行試験」は10科目ということだったのですが、このふたつが外されたために、新たに2科目付け加えられることとなり、そのふたつはことのほか難題であったのです。

そのひとつ、11番目の林檎の話に行きましょう。「ヘスペリデス」というのは、3人のニンフたちの名前です。西の最果ての地に、ゼウスとの結婚を祝ってガイアがヘラに贈った黄金の林檎の樹の植えられた園があり、神様の不死の飲み物であるネクタルという美味しい液体が湧き出る泉の岸辺で、彼女たちは100の頭を持つ大蛇のラドンとともに、これを守っているといわれます。この林檎を取ってこい、というのが、エウリュステウスの命令でした。

まずこの園のありかをつきとめるのが大変でした。これはまえにもしばしば出てきたオケアノス（大洋）のほとりにあるのですが、人間にはそこへ行く道を知るのは許されていないのです。このときヘラクレスにそれを教えてくれたのがプロメティウスです。

「黒海」と「カスピ海」の間、現在コウカサス地方と呼ばれるあたりを通りかかったときのことです。彼は、かの人類の恩人プロメティウスが岩壁にくくりつけられて大鷲に肝臓を食い破られているのを目撃したのです。ヘラクレスは心から義憤を覚えました。弓をきりきりと引き絞ると、大鷲めがけてひょうと射る……鷲は毒矢にあたって、まっさかさまに谷間へ……。ヘラクレスが恩人の手枷足枷を解いてやったのは言うまでもないことです。

自由になったプロメティウスは、ヘラクレスにお礼として、ヘスペリデスの園へ行く道と、そこでの策を授けました。なにしろ人間には門戸が閉ざされている禁断の場所ですから、なにかうまい手立てを講じる必要があります。

園のある西の果てには、プロメティウスの兄弟であるアトラスというティタン族の神様がいました。そこでアトラスは天空を肩に担いでいるのです。これはティタノマキア（ティタン族とゼウス軍との戦い）でティタンが負けたとき、刑罰としてゼウスから与えられた仕事です。プロメティウスは、この兄貴に頼んで林檎を取ってきてもらうよう、ヘラクレスにすすめたのです。

最果ての地に辿り着いたヘラクレスは、教えられた通り、アトラスに向かってこう言いました。

「アトラス様、あなたなら、神様ですから、園へは行って林檎を取ってくることがおできになるでしょう。その間、ぼくが代って天空を支えていますよ」

アトラスはびっくりしました。こんな人間がいようとは思ってもみなかったからです。若者をじろじろ眺めまわし、からかい半分に、

「なるほど、そうとう力がありそうだな。ためしにちょっと担いでみるかね？」

と言って、ひょいと天空をヘラクレスの肩にのせてみました。なんと、若者はびくともせず、しっかり天空を担いだではありませんか。

「うーん、これは驚いた。大した奴だな。よし、林檎を取ってきてやる」

そう言うより早く、重荷を下ろして軽くなった肩をくるくる回しながら、アトラスは駆け出して行きました。

帰ってきたアトラスは、金の林檎を3つも手に持っていました。しかし、なかなかヘラクレスに渡そうとしません。身軽さを味わったあとでは、もう天空を担ぐのがいやになってしまったのです。あわよくば、このうっとうしい仕事を人間の若者に押し付けて、逃げ出してしまうかと思っていました。

それを見て取ったヘラクレスは、

「肩当の具合を直したいんですが、すみません、ちょっといいですか」

と言って、天空をアトラスの肩にのせ、林檎を奪ってギリシアめがけて一目散……。アトラスは天空を放り出すわけにも行かず、地団太踏みながら、仕方なく元のように担ぎつづけたというわけです。

メルカトル図法の創始者メルカトル(1512-1594)は、この図法によって作った世界地図を「アトラス」と命名しました。地図は、空を担いでいるアトラスの視点から見た地球の姿だったのでしょうか。

ヘラクレスのお話はまだまだ尽きません。また英雄は彼ひとりではなく、他にもメデッサの首を取ったペルセウスをはじめ、たくさんいますが、そろそろ、ほかの人間たちのこともお話したいので、残念ですが、この辺でおしまいにしましょう。ただ、アテナの助勢を得て、巨人族との戦いを勝利に導いたのもこの英雄だった、ということ、そして英雄は死んでから天にあげられて神になる例がある、ヘラクレスがそうであった、と付け加えておきましょう。

◆ 王たち

プロメティウスから「火」をもらった人間は、しだいに文明化された社会を生み出し、文化的な生活を営むようになりました。彼らはそれぞれの土地で国を作り、王がその国を治めていました。神話には、こうした人間の話もたくさん出てきます。そこで、ここでは人間の代表として、ふたりの王様のお話をしましょう。ミダス王とオイディプス王です。

ミダス王

ミダス王のお話にはいる前に、ちょっとコメントしておいた方がよさそうなことがあります。それは、「ギリシア神話」には、英雄が半神であるという例でもわかるように、人間と神、人間と動物、動物と神、植物と神といった区別の判然としない、中間的な存在がある、ということです。

女性の中間的存在の代表は、ニンフです。近代のお話のなかでも、水の精をニンフということはよくありますが、もともとこの言葉は「娘」とか「花嫁」といった意味で、水に限らず、自然現象のなかにいる美しく若々しい女の神様のことです。

それに比べて男性の中間的存在はあまり美男という感じがしません。サチュロス、シレノス、パンなどと言われる、野山を駆けめぐる半神たちは、酒好きで、酒と祭りの神様ディオニュソス（ラテン名バックス、英語バッカス）のお供をすることが多く、ニンフを追っかけまわす好色のイメージが付きまっています。形は人間に近く、耳がとんがっていたり、馬の尾っぽを持っていたり、かなりグロテスクです。でも象徴主義を代表するフランスの詩人マラルメ（1842－1898）の『牧神の午後』、それを音楽にしたドビュッシー（1862－1918）の『牧神の午後への前奏曲』は、人間がまだ自然の一部であった頃、ともに生活していたニンフやパンの、汚れない息吹を伝えているような気がします。

前置きが長くなりました。ミダス王という人は、この半神半人半獣のシレノスのひとりが酔っ払って農夫たちの罌にかかったとき、自分の王宮へ連れてきて10日間歓待したことがあるのです。年取ったこのシレノスは、じつは先に触れたディオニュソスの養育者でした。ゼウスの子でありながら、幼いときから各地を放浪して数奇な生い立ちをしたディオニュソスは、この恩人を大切に思っていましたので、ミダス王の行為を嬉しく思い、感謝を表すために、ひとつだけあなたの願いをかなえてあげよう、と申し出たのです。

「いやあ、べつにたいしたことをしたわけでは……」と謙遜しながらも、めったにないチャンスです、何が欲しいか、王は一生懸命考えて、「やはり、金だ」

という結論に達しました。世論調査をしたら相当のパーセントを占めるであろう、蓋然性の高い結論ですから、そこまでは何のこともなかったのですが、方法がいささかまずかった、「私が手で触れるものをすべて金に変えてください」とディオニュソスに頼んだのです。

このあとどうなったかは、みなさんよくご存じでしょう。はじめのうちはよかったものの、手に触れるものはすべて、食べ物も、飲み物も、かわいい娘までが金に変わってしまっただけは、自分の運命を呪わずにはいられなくなり、王は浅はかだったことに気づいて、ディオニュソスに、もとへ戻してくださいと頼みました。

ディオニュソスは川の源流で身を清めるように教え、その通りにして王はようやく金の魔力から解放されたのでした。

次にこの王が登場するのは人間と神の音楽合戦の場面です。

パリのルーブル美術館には、『楽器の腕前を競うアポロンとマルシュアス』というタイトルのついた1枚の絵があります。描いたのはペルジーノ（1445－1523）というフィレンツェの画家です。おだやかな自然の風景のなかに、ふたりの裸の男性がいます。向かって右側の、金髪を風になびかせて長い杖を持って立っているのがアポロンです。そばに豎琴がたてかけてあります。豎琴をはさんで左側に、石に腰掛けて縦笛を吹いている少年がいます。人間としか思えません、からだの色がアポロンにくらべるとくすんだ灰色をしていて、よく見ると丸坊主の頭の額のあたりが角でも生えるように少し盛り上がっているところがあります。マルシュアスはサチュロスなのです。しかし、この絵をはじめ多くが彼を人間として扱っているように思われますので、私もこれを人間と神の競技としてお話ししたいと思います。

マルシュアス少年は、ある日野原で1本の縦笛を拾いました。それはアテナが天から捨てたものだったのです。アテナはもともとアポロンの豎琴に対抗しようとしてこの笛を作ったのですが、笛を吹くにはほったたけをふくらませなくてはならないので、その顔が可笑しいと笑われて嫌気がさし、「ヤーメタ」と言って、捨ててしまったのです。

マルシュアスは笛が大好きだったので、拾った笛を毎日吹き鳴らしました。この笛は普通の笛より音程を下げて作ってあったために、独特の哀調を帯びた、深い音色を奏でます。マルシュアスは練習を重ね、聞く者がみなそのとりこになるような、悲しく美しい曲を作って野山に響かせたのです。

マルシュアスの音楽の才はアポロンに匹敵する、いやアポロンにまさるのではないか、という評判が立ちました。心に染み入る音楽という点ではたしかに自分の方が上かもしれない、と少年もいささか自負を抱きました。人間やサチュロスの悲しみは神様にはわからないものだから、と。

アポロンはこれに嫉妬しました。神が人間やサチュロスに劣るなどということがあっては人間にしめしがつかない、という政治的思惑もありました。はじめからマルシュアスを懲らしめる目的で、試合を申し込んだのです。

ヘリコンという山の上で、詩と芸術の女神ムサ（ミューズ）に何人かの人間をまじえて審判グループが構成され、競技が行われました。こんな面白い試合はめったにありませんので、観衆はわんさと詰めかけました。たいていが少年側のサポーターです。しかしそれをあからさまにするのは神々の前では憚られるので、みんな心の中で応援していました。

最初にアポロンが竖琴を奏でました。すばらしい演奏でした。次はマルシュアスです。これもテクニックを凝らしたすばらしいものでした。1回戦はどちらがどちらとも決めかねる、完全に互角の勝負でした。2回戦にはいると、突然アポロンは竖琴をさかさまに持って演奏しはじめました。そして相手に向かってこう言ったのです。

「マルシュアス、お前はたしかに音楽の天才だよ。だったら俺のように、その笛をさかさまにして吹いてみな。どうだい、吹けるかい」

なんという意地悪な言い草、「いじめ」のルーツはここにある、と言いたくなります。笛をさかさまに吹くなんて、できっこないじゃないですか。マルシュアスはここで2回戦を放棄せざるを得ませんでした。

この勝負、勝った者は負けた者に何をしてもよいことになっていました。アポロンはこのとき、実に残酷きわまる刑罰を科しました。生きたままマルシュ

アスの皮を剥ぎ、逆さにして木に吊るしたのです。プロメティウスの例でもわかる通り、神々は人間が増長して神の座をおびやかすことを極端に恐れるのです。権力者には疑心暗鬼が付きもの……それにしても、ひどいですね。ただし、これは見方によっては、マルシュアスの吹く笛があきらかにアポロンの豎琴を抜いていたことを証立っている、とも言えます。

もっとも処刑が行われたのは少しあとのことになります。競技ですから、審判者の判定によって勝ち負けを正式に裁定しなくてはなりません。ミダス王はこの審判のひとりだったのです。

王はマルシュアスの演奏に深く心を動かされていました。ミダス王の国は小アジアのフリギア地方にあるのですが、このあたりの音楽は短調の旋律が多く、少年の奏でる調べに故郷の里歌に共通するものが感じられたのかもしれません。それにアポロンのやり方にも納得できませんでした。「いかん、音楽と手品を混同しとる」と、批判的にとらえていました。

しかしムサたちの判定はアポロンの勝ちと出ていますし、彼もアポロンのご機嫌を損じるのが得策でないことはわかっていたのです。でもいろいろ考えた末、やはり理性の判断にしたがうことにしました。せっかく審判としてこの競技に招かれたのだから、率直に意見を述べるほかあるまい、と、

「マルシュアスの笛には打たれました。彼の勝ちですな」

そう言ったとたんに気がつかしました。このような判定をくださったのは彼ひとりきりだったのです。まずい、と思ったところへ、雷のようなアポロンの怒声が落ちました。

「ミダス！ お前の耳は、音楽の良し悪しも聞き分けられないのか。そんな耳はロバの耳だ。これからずっとロバの耳をしているがいい。わかったな！」

すると、見る間に王の耳はによきによきと伸びてロバの耳になってしまいました。

これから先の話も、みなさん、ご存じではありませんか。国へ帰った王様が誰にも知られないように帽子をかぶって過ごしているうち、たったひとり秘密を知った床屋が「王様の耳はロバの耳」と穴に向かって叫んだために、風がそ

の秘密を運んで、みんなに知らせてしまった、というお話です。

私はこのミダス王という人物が大好きです。何が欲しい？ と聞かれて、「お金」と答えるのも、郷里の歌に似た音楽に軍配をあげるのも、彼の正直さ、人間らしさを表わすものだと思います。人の尻馬に乗って正義を振りかざすのはたやすいけれど、ひとりになっても、正しいと信じたことを、勇気を持って主張するのはとても難しいことです。ミダス王のような人が、レフェリーのなかにもっといたら、マルシユアスは吊るされなくてすんだのではないのでしょうか。

オイディプス王

テバイの王ライオスは、妃のイオカステとの間に子供を作らないようにしていました。それは神託によって、「もし子供がうまれたら、その子供は父を殺し、母を娶るであろう」と予言されていたからです。しかし、つい酒に酔って妃を抱き、妃は妊娠して男の子を産み落としました。

ただちに子供を殺すように、と夫から命じられたイオカステは、せっかく生まれた子をその手にかけるに忍びず、箱にいれてコリュントスの山に捨てさせました。

これを羊飼いたちが見つけて、コリュントスを治めていたポリュポス王に届けます。王夫婦には子供がありませんでした。「神様からの授かりものだ」と喜んでこの子を育てました。捨てられたとき、腫に穴をあけて縛られたために足が腫れ上がっていたので、「腫れた足」という意味のギリシア語 オイディプスという名がつけました。

青年になったオイディプスは、ふとしたことから、自分の出生に疑問を抱きました。両親に訊ねますが、はかばかしい返答が得られません。そこでデルボイの神殿まで行って、神のお告げを聴くことにしました。

「お前には呪いがかけられている。故郷へ帰ってはならぬ。帰れば父を殺すことになるぞ」

そう告げられて青年はびっくりしました。故郷というのはコリュントスのこ

と、父とはポリュポス王のことと信じて疑わなかったので、コリュントスへは帰らず、そのまま放浪の旅に出ました。

できるだけ故郷から遠くをめざして彼が取った道は、テバイの方角を指していました。途中の狭い山道で、向こうから来た馬車に行き逢いました。そこには立派な風体の老人が乗っており、道をどちらが譲るかで口論になりました。いま来た道に戻れと居丈高に命じられて、オイディプスはむっとしてこれを断わります。すると御者は車輪で青年の足を踏みつけ、強引に進んで来ました。オイディプスはこれを押し返します。すると馬車に乗っていた老人は、持っていた杖でオイディプスに打ちかかってきました。揉みあいになり、馬車はそのはずみで谷底に転落してしまいました。老人は即死でした。

オイディプスは旅を続けます。テバイ地方に足を踏み入れたところで、彼はスフィンクスに出会います。

スフィンクスはみなさんご存じでしょう。旅人に謎をかけ、その謎を解くことのできない者を食べる怪獣です。オイディプスにかけられたのは、「朝は4本足、昼は2本足、夜には3本足になる動物、なあに？」という謎々で、これを青年は「人間」と解いたのです。スフィンクスは谷底に身を投げ、これ以降、旅行の安全は確保されるようになりました。

テバイの都に青年がはいって行きますと、町にはふたつのニュースが飛び交っていました。ひとつはライオス王が死んだこと、もうひとつはスフィンクスが退治されたことです。オイディプスは、山道で自分が殺した老人がライオス王だったとは知りませんでした。ましてやそれが自分の実の父親であろうとは、知るよしもありません。このとき、すでに予言のひとつ「父殺し」は成就してしまっていたのですが、そうとは露知らぬ身のオイディプス、スフィンクス退治の功績によって、空席となったテバイ国王の座につき、先王の妃イオカステを妻とするよう、人々にまつりあげられたのでした。予言の二つ目「母を娶る」も、ここに成就されることになります。

オイディプスはよい王でした。スフィンクスを退治したのも人々が安心して旅ができるようにと願ってのことでしたから、民の暮らしが平和で豊かである

ことを願い、善政を施していました。しかし時として人為では如何ともしがたいことも起こります。テバイの場合、それは疫病でした。

都を恐怖に陥れる疫病の猛威、これを鎮めるにはどうしたらよいか、オイディプスはまたデルポイの神託を聴くことにしました。答はこうです——「前王ライオスを殺害した者をこの町から追放すれば、疫病はおさまるであろう」。

オイディプスが町中にお触れを出して、ライオス殺害の下手人を探し出せと命じたのと時を同じくして、コリュントスから使者がやってきました。ポリュポス王が亡くなったという知らせです。王位継承者はオイディプスしかいないのだから、コリュントスに戻って王となってくれ、というのが使いの趣でした。

自分が殺害者となることを恐れて父のもとを去ったのに、王が天寿をまっとうして亡くなった、ということはいささか不思議でしたが、まだその妃メロペが残っている、と聞いてオイディプスは使者にきっぱりとコリュントスへ戻ることを断りました。すると使者は、耳を疑わせるようなことを言ったのです——「あなた様の恐れがなんの根拠もないのを、ご存じないのですか。あなた様とポリュポス様ご夫妻との間に、血のつながりは少しもございませんものを」。

「なんだと？ それならどうして俺を子と呼んでくださったのだ？」

「それはあなた様を、私がこの手でおふたりに差し上げたからです」

この使者は、オイディプスをキタイロンの山の谷間でみつけた羊飼いの仲間だったのです。使者は、さらにそのときのいきさつを知るライオス家の牧場番がまだ生きていることを王に告げ、王はイオカステがとめるのも聞かず、その老いた羊飼いを召しだして問い糾します。

「その子供をどこから得た？」

「ライオス様のお家から」

「奴隷か、それとも血筋の者か？」

「あのお方のお子とのことでございました。内においでのお方様からお預かり致したのです」

「なんと！ あれがその子をそちに与えたのか。なんのためだ？」

「そのお子を私が殺めるため」

「わが子を、か？ そんな非情なことを、なぜ？」

「神託の凶兆がまこととなるのを恐れてのことでございます」

「そ、それは如何なる……？」

「その子は父を殺すであろう、と」

ここにたって、オイディプスはすべてを悟ったのでした。

「おお、光よ、俺がお前を見るのもこれが最後だ。父とすべきでない人に生を享け、交わってはならぬ人と枕を交わし、傷つけてはならぬ人の血を流したこの俺が！」

そう叫んで宮殿に走りこむと、悲劇はさらに彼を待っていました。子と交わってさらに子までもうけたイオカステが彼に一步先んじてすべてを知り、夫から夫を、子から子を産んだその忌まわしい臥所で首をくくって果てていたのです。オイディプスはその不幸な母を下ろして地上に横たえると、彼女が胸につけていたブローチを取って、その針をみずからの眼に突き刺しました。一度ならず、何度も、何度も……。血潮は髭を染め、黒く、滴り落ちました。

それから扉を開いて、オイディプスは大声で言いました。

「すべての民よ、これなる父の殺害者、これなる母の——いや、この冒流の言葉はわが口から出てはならぬ——者を、この国から放り出せ。わが身が呪われたように、この家、この国に呪いがかからぬよう、一刻たりともこのわたしをここに置いておいてはならぬ。さあ、早く」

このとき、どうして眼を潰したのか、と訊かれて言った言葉はこうでした。

「目があいていれば、冥府で父上にどうして顔が合わせられよう。母上にとて同じことだ。俺がこうして作った子供たちを見ることが、俺にとって嬉しいとも思ふか。町も、塔のある城壁も、神々のみ姿も。みじめなこの俺の姿も。テバイのもっとも尊い子たる俺は、われとわが身で、これらすべてのものを己から剥奪するのだ」

娘のアンティゴネが盲人となった父を助けて放浪の旅に出ました。アテナイの近くにあるコロノスという小村で、この悲劇の生涯は閉じられた、と伝えられています。

オイディプス王の悲劇を後世に伝えたのは、古代ギリシア悲劇 3 大詩人の 2 番目ソフォクレス (BC496?－406) です。ついでに言えば、『エレクトラ』もこの人の作です。『オイディプス』『コロノスのオイディプス』は、まさに「悲劇」とはこのようなものを指す言葉だと感じさせる名作です。非情な運命に操られながら人間としての尊厳を失わず、高い倫理性と、苦悩を引き受けて生きる毅然たる勇気を示したオイディプスの姿に感動しない人はいないでしょう。近親相姦や尊属傷害を日常茶飯事としている、あのあつけらかんとした神々たちに、人間の爪の垢でも煎じて飲ませたいですね。

さて、次はいよいよ、こうした立派な人間たちの壮絶な戦い、トロイア戦争のお話に移ることに致しましょう。

第三章 トロイア戦争

◆ トロイア

トロイアという地方は、エーゲ海を挟んでギリシアの対岸にある小アジアの北端を占める位置にありました。現在はトルコ領です。スカマンドロス平野と呼ばれる地味豊かなこの平地にイロスという人間が、その名を取ってイリオス、またはイリオンと呼ばれるようになる首都を作りました。（ホメロスの叙事詩『イリアス』の題名はここから来ています。）

このイロスから、二つのトロイア王家が生まれます。ひとつは息子のラオメドンの直系で、トロイア戦争のときの王であるプリアモスの王家、もうひとつは分家で、同じくトロイア戦争の勇将アイネイアスを生むことになります。このアイネイアスが戦後イタリア半島に逃れて、レムス、ロムルスの曾曾祖父となるアエネアス（ラテン名）です。戦争によってプリアモスの王家は絶えることになるのですが、もうひとつの方は子孫のローマ建国によって、永久に存続した、と言っていいでしょうか。

建国後まもなく、ゼウスは守護と好意のしるしとしてアテナの像をこの国に贈りました。彼女を女神として敬うときは「パラス・アテナ」という言葉が使われます。ゼウスが贈ったのはこのパラス・アテナの像で不思議な魔力を持つパラディオンと呼ばれるものでしたが、この像は前触れもなしに、突然天から降ってきてイリオンの町に落ちたのです。トロイアの人々はたいへん喜び、イロスはアテナを祀る大神殿を建立し、このパラディオンを安置しました。この国の運命を決する力を持ったこの像のことは、あとで重要な役割を果たします

ので、記憶にとどめておいてください。

イロスの後を継いでラオメドンが王となったとき、市の城壁を築くために、オリュンポスからポセイドンとアポロンが来て協力しました。これは前にお話したように、ふたりがゼウスに反抗したので、懲罰の意味で派遣されたのですが、トロイア側としてはそんなこととは別に、お世話になったのだからその報酬を当然払うべきだったのに、払わなかったのです。アポロンはその罰として毒矢で疫病を流行らせるだけで満足しましたが、激しい性格のポセイドンは怒りにまかせて、海に住む大怪物をトロイアに送り、人間たちを貪り食わせました。

ラオメドンは海神の怒りを鎮めるために、愛娘のヘシオを生贄として捧げなくてはなりません。海岸の岩にくくりつけられて、あわや怪獣の餌食となろうとしているところを、あの義侠心に富んだ英雄ヘラクレスが通りかかりました。ヘラクレスは怪物を倒して娘を救ってくれました。それなのに、またまた吝嗇なラオメドンは、ヘラクレスに約束したお礼の白馬2頭を、あげることを拒んだのです。

この白馬というのは、イロスの父親、最初の建国者でトロイアの名のもととなったトロスが、ゼウスからもらった牝馬です。同性愛の傾向も大いにあったゼウスは、トロイアに近いイダの山で羊飼いをしているガニュメデスを見てその美しさに魅せられ、大鷲に姿を変えてこれを攫^{きう}って天上に連れていきました。酒宴で、ゼウスの杯を満たす役の小姓として使うためでした。このエピソードは星座となり、酒壺を抱える美少年は水瓶座に、それを攫った大鷲は鷲座となって夜空に輝いています。ゼウスがトロスに、少年の身の代として贈ったのが不死の白馬の牝2頭、それとヘパイストスに作らせた黄金のぶどうの木でした。ヘラクレスはこの馬が欲しかったのです。

ラオメドンの手前勝手な仕打ちに、ヘラクレスは大いに憤慨しましたが、このときは例の12番目の難行の帰りだったので、いったんはギリシアに戻りました。しかし、あらためて軍を率いてトロイアに遠征し、ラオメドンとその息子たちを殺し、町に火をつけて焼き払いました。

末の息子の幼いポダルケスだけが姉たちの命乞いによって救われ、のちに成

人してプリアモスと名乗ったのです。ヘラクレスがこの者にトロイア全土の統治をまかせたところ、これがなかなかの名君で、領土は繁栄し、拡大の一路をたどりました。プリアモスの妃はヘカベと言いますが、このふたりの間にヘクトル、パリスほかトロイア戦争の立役者となる大勢の子供たちが生まれ、トロイアは全盛期を迎えました。

さあ、以上が戦争の背景となるトロイアの状況です。戦争の原因、発端については次の項目でお話することにしましょう。

◆ なぜ戦争が起こったか

戦争というものはなぜ起こるのでしょうか。

トロイア戦争の発端はヘレネという絶世の美女をめぐるギリシア・トロイアの男性たちの争いですが、そのような争いを生じさせるのを黙認した、と言うか、むしろ積極的に意図したのはゼウスであって、そこにはある魂胆がかくされていたようです。

オリュンポス内閣に政治をまかせて、隠居状態だったおばあさま女帝、大地の女神ガイアが、「この頃、人間が増えすぎて、重くてかなわんわ」とぼやくのを聞いたゼウスは、たしかに世界の人口が増えていること、それにともなって、食糧問題と失業問題が深刻化していることに気づきました。法務大臣のテミスを呼んでひそかに対策を協議しますが、名案が浮かびません。昔も今も経済活性化とか景気浮揚とか、言うはやすく、行うに難い事柄なのですね。小手先の改革ではどうにもならん、これは大鉈をふるわなくては、と総理の一声で決まったのが、大きな戦争を起こさせて、いっきよに人間の数を減らすことだったというのですから、なんだか考えさせられる話ではありませんか。

おりしも、海の女神テティスと、のちのギリシア側の勇将アキレウスの父親ペレウスとの婚姻が結ばれ、その披露宴が神々の臨席のもとに、はなやかに執り行われようとしていました。

この宴に、争いの女神エリスが招待されなかったのです。どういうはずみか、

わかりません。不和や争いはおめでたい席になじまない、ということかもしれませんが、おそらくはゼウスの意図がこの辺に働いていたと見るのが適当でしょう。

エリスは面白くありませんでした。宴会を引っ掻き回してやろうと、悪戯をしかけました。あのヘラクレスが採りに行かされたヘスペリデスの園の黄金の林檎をひとつ採ってきて、饗宴の席にポンと投げ込んだのです。そこにはひとこと「誰よりも美しい女神に」と記してありました。

さあたいへん、女神たちの間に対立と睨み合いがはじまりました。中でも自信満々だったのは、ゼウスの妃ヘラ、男まさりの美女アテナ、そして美女といったらこのわたしをおいて誰をさすのよ、と思っているアプロディテでした。この3人は一歩も譲らず、「この林檎はあたしのものよ」と主張したので、收拾がつかなくなりました。「ゼウスの裁定を仰ぎましょう」ということになり、3人はゼウスの席に詰めかけました。

ゼウスはこのとき、不思議な解決方法を提示しました。

「トロイアの王子パリスに決めてもらいなさい」

と言ったのです。

パリスはプリアモスの二番目の息子です。彼が生まれるとき、母親のヘカベは奇妙な夢を見ました。自分が松明^{たいまつ}を産み、それが町中を焼き尽くすという夢です。プリアモスはこの夢を不吉な兆しと見て、生まれた子を山に捨てさせたところ、熊がこれを育てました。いまやこの子供は美しい少年に成長して、イダの山中で羊飼いをしているのです。そこは、ゼウスがかつてガニュメデスを見つけたことのある場所ですから、この容姿端麗な少年にも天上から好色な眼差しを注いでいたのかも知れませんが、それにしてもゼウス大神、迷惑なことをしたものです。トロイアの滅亡はゼウスのこのひと言で運命づけられてしまったのですからね。

女神たちはトロイアへ飛んで行きました。羊の番をしている少年の前に、めいめい装いを凝らした美女が3人忽然と姿を現したので、パリスはびっくりしました。口々に自分の美しさを言い立てるのですが、経験のとぼしいパリス君、

しかも相手はオリュポスの偉い神様たちです、どっちがどっちより綺麗だなんて判定は、とてもくだせたものではありません。困り抜いていると、お供についてきたヘルメスが助け舟を出しました——「女神様方、こういうときは、自分に有利な判定をくだしてくれたら何をあげる、と、交換条件を提示したらどうです?」。つまり賄賂ですね。でも審美眼が備わっていない審査員にコンクールの審査をやらせようというのは土台無理ですから、こんな方法に頼るのも仕方がないかもしれません。公正な審査でなくてはならないという法律もまだなかったのです。

ヘラは世界の支配権を、アテナはあらゆる戦争での勝利を、そしてアプロディテは世界一の美女を約束しました。パリスはほんの僅かの間躊躇しましたが、すぐに黄金の林檎を取って、アプロディテに渡して言いました。

「これは貴方のものです、女神様」

パリスは山を降ります。姉のカッサンドラによって正当な王子であることを証明してもらい、しばらくトロイアにとどまっていました。そのうち、アプロディテの計らいによって、ギリシアへの親善旅行にでかけることになります。スパルタの王子メネラオスの若妻ヘレネ、これが彼に約束された世界一の美女であり、アプロディテはいよいよこのふたりを引き合わせることにしたのです。

当時での世界大戦のきっかけを作ったこのヘレネとは、どんな女性だったのでしょうか。ここで私たちの話もギリシアに戻り、ヘレネの生い立ちを見ることにしましょう。

ヘレネはスパルタの王妃レダがゼウスとの間にもうけた娘です。レダにはれっきとした夫があつたのですが、ゼウスは白鳥に身をやつして彼女のもとに通いました。レダと白鳥の間にできたヘレネ(卵から生まれたといわれています)の美しさは、大きくなるにつれて、ギリシア中の評判となりました。王子、君主、英雄、武将の多くが、彼女を妻にしたいと、養父の王のところ集まり、先を争って求婚しましたので、大騒ぎとなりました。決闘で決めよう、などと物騒な案も飛び出したため、イタケ島の領主オデュッセウスが調停案を出しました。

「まあまあ、落ち着けよ。われわれはこうして、ヘレネの美しさに惚れて集

まってきたわけだから、ヘレネをそっちのけにして事を決するわけにはいかない。夫選びはヘレネ自身にまかせようじゃないか。その代わり、今後ヘレネの身の上に何か起こったら、いまここにいるギリシア中の求婚者は一致団結してヘレネの夫を助けるために立ち上がる、という盟約を結んだらどうだろう」

皆これを了承し、ヘレネが選ぶ花婿は誰か、固唾を飲んで見守りますと、美女は、ミュケネの王とクレタの王の血を引き、いまスパルタの王家に身を寄せているメネラオスを選びました。戦争が起こるとギリシア側の総大将となるアガメムノンはこのひとの兄です。メネラオスはヘレネの養父テュンダレオス王の信任の厚い温厚な人物で、事実彼はテュンダレオス王の死後スパルタの王位を継ぐことになります。

結婚生活は順調に進んで、かわいい娘も生まれていました。

そこへパリスがやってきたのです。女神はスパルタにあるメネラオスの館を表敬訪問するよう、パリスに勧めました。当時「黄金のトロイア」と呼ばれていた繁栄の国からのお客様なので、彼は下にも置かないもてなしを受けました。むろんヘレネとも会います。一目見てパリスはその美しさのとりこになりました。

パリスが滞在している間にメネラオスはクレタ島へ、祖父の葬儀のために出かけなくてはならなくなりました。この夫不在の数日間に、パリスはヘレネを口説きました。アプロディテが味方についていれば、当然エロスすなわちキューピッド（ラテン名クビドの英語読み）もついていきますから、相手は簡単に口説き落とされてしまいます。

「いっしょに逃げてくれませんか」

「いいわ、でもどこへ？」

「トロイアへ！」

出奔するついでにメネラオスの財宝のいくつかも頂戴して行っただけと言いますから、ちゃっかりしていますね。

メネラオスは帰ってきて、妻が姿を消しているのに、びっくり仰天しました。聞けばトロイアの王子が奪って行っただけのこと。ここに、かつての盟約が甦っ

てきたのです。

「ギリシアの勇士たちよ、結集せよ。ヘレネ奪還のために、トロイアに遠征だ！」

呼びかけにこたえて、ぞくぞくと武将たちが集まってきました。メネラオスの兄アガ멤ノン（アガメムノン）を総大将とし、1000 艘を超える船に 10 万の兵を乗せ、ギリシア軍はトロイアめがけて、

「いざ、出撃！」

ということになったのです。

◆ トロイア・ギリシアの英雄たち

ここで、まず両陣営の主要人物の名前をあげておきましょう。このほかにもまだまだ重要な人物はいますが、それは戦争の経緯のなかで紹介することとして、最小限にとどめます。またこの戦争の特徴はオリュンポスの神々がやはり二手に分かれてそれぞれの陣営を最^{ひい}最^き、さまざまな助力を惜しまず与えたことにありますので、神々がどちらに付いたか、も、同時に示すことにします。

ギリシア側	トロイア側
アガ멤ノン（総大将）	プリアモス（王）
メネラオス	パリス
アキレウス	ヘクトル（総大将）
オデュッセウス	アイネイアス
ディオメデス	グラウコス
ネストル	カッサンドラ
パトロクロス	ヘレノス

神々の立場

ゼウス（中立）

アテナ

アプロディテ

ヘラ

アポロン

ポセイドン

アレス

ヘパイストス

では、これらの人物を簡単に紹介しながら、戦争についても少しずつ話を進めましょう。（ ）のなかの記号はGがギリシア方、Tがトロイア方をさしています。また、順番は必ずしも表の通りではありません。

アガメムノン（G）

アガメムノンは、「ギリシア神話の舞台」でお話したミュケネの王様です。トロイアを発掘したシュリーマンは、この王が住んでいたミュケネのお城も発掘しました。城郭のあと、墳墓などを今も見ることができます。ここで父のアトレウス王が叔父とその息子アイギストスに殺されたとき、弟メネラオスとともにスパルタのテュンダレオス王を頼り、成人して父の仇討ちを果たして王となったのです。ついでに、テュンダレオス王の娘クリュタイムネストラを妻に迎えました。これはヘレネのお姉さんです。エレクトラの母親でもあります。

トロイアへ向かって船出をしようと、兵士を乗せた船が勢ぞろいしたのは、アウリスという深い入り江になった港でした。帆を高々とあげて、いざ出航、という段になって、風が風ぎ、無風状態が続いたため、1000余艘の船舶は足止めをくらってしまいました。

こういうときは占いに頼るのが昔のならいです。軍に付き添っている専属の陰陽師はカルカスと言いました。彼は、軍勢が神々に必勝祈願をしたときに大蛇が8羽の雛鳥と母鳥を飲み込んだのを見て、この戦いは9年かかる、10年目によりやくトロイアの城は落ちる、と予言したのですが、この無風状態につい

でも、次のような託宣をくださいました——「これは、アガメムノンが狩の腕前を誇るのがアルテミス様の逆鱗に触れて、罰を受けているのじゃ。長女のイフィゲネイアを犠牲として捧げればお怒りはとけよう」。

そこでアガメムノンは「結婚させる」といつわって、国許から娘を呼び寄せ、アウリスの港近くの祭壇で、殺して生贄としました。

すると風が捲き起こり、船はするすると動き始めたのでした。

総大将ともなれば私情を殺さなければならない、戦争にはこうした思想がつきものですから、人々はアガメムノンのしたことを是認したでしょうが、妻に見ればこれはとんでもないことでした。めでたい婚礼との知らせに喜んで娘に付いてきたのに、この残酷な場面に立ち合わせられ、クリュタイムネストラはすっかり夫にたいする愛情を失いました。夫の留守中、敵であるアイギストスと通じ、凱旋した夫を謀殺したのは、いとしい娘を殺された恨みからだ、彼女はのちに、今度は自分がわが子エレクトラとオレストスに殺される場面で、弁明しています。

しかし、それはずっと後のことです。ともあれこの傷ましい犠牲によって、ようやくギリシア軍はトロイアめざして船出できたのでした。

アキレウス（G）

アガメムノンは1万の軍勢を率いる総司令官としては優秀な人材だったと思われませんが、戦いの場での逸話はあまり残っていません。それにひきかえ華麗な若武者姿、飛ぶような駿足、水際立った戦いぶりでギリシア軍の花と謳われたのは、このアキレウスです。

アキレウスは例の黄金の林檎事件の婚礼で結ばれた、テッサリアの王ペレウスと海の女神テティスの子です。じつはこの婚礼以前にゼウスがテティスに目をつけていたのですが、予言によって「テティスが産む子は父を超える」と言われていたので、リスクを避けて断念し、ペレウスに娶わせたのでした。

アキレウスが生まれると、母親のテティスは、その両足を持って黄泉の国を

流れるステュクス川に全身を浸しました。それはこうすると人間の体にも死に対する免疫ができるからです。アキレウスは神に近い不死身の体となったのです。

ただ1箇所だけ、この川水に浸されないところがありました。それは踵です。テティスは赤ん坊の踵を握って、さかさまに水に入れたので、ここだけ免疫が得られず、不死身でなくなってしまったのです。これがアキレウスの唯一の弱点でした。「アキレス腱」という言葉はここからできたのです。のちにここを狙われて、彼は命を落とすことになります。

アキレウスは、もしこの戦に従軍すれば命を落とすことになるろうとの託宣を受けていました。しかし一方で、ギリシア軍はアキレウスが参加しなければ勝てないだろうとの神託もあったのです。若くして名誉の戦死をとげるか、無名のまま祖国に老いるか、二つに一つの選択でした。母のテティスはなんとしても息子の命を守りたかったので、遠征軍の誘いを避けるために、彼をある島に隠しました。王の娘たちの中に女装させていれてもらったのです。

ギリシアの勝利がこの若者の参加にかかっていることを知った、いまひとりの戦争の立役者オデュッセウスが、彼をスカウトしにやってきました。オデュッセウスは力もさることながら、それを上回る智謀の持ち主でした。女性用の化粧品や装身具のセールスを装って^{やじり}宮廷内にはいり、女たちに好きなものを取らせたのですが、中に、剣や^{やじり}鎌などの武具をいれておいて、ひそかに反応をうかがいました。

ひとりだけ、目深にヴェールをかぶった娘が、ハンカチや宝石には目もくれず、ちらりちらりと武具の方に視線を向けています。そのうちとうとう我慢できなくなったのでしょうか、短剣をとって、その研ぎ具合を試すように、そっと触ってみています。「これだ、アキレウスは」とオデュッセウスは思い、そばに歩み寄りました。

母を悲しませたくない、という思いは強かったものの、やはり若者として「人並みすぐれた能力を人のために使ってほしい、勝利は君の肩にかかっているのだ」という先輩の懇請にはもだし難いものがあったのでしょうか。アキレウスは

トロイア遠征軍に加わりました。

ところが、やはりどこかに母親の期待を裏切ったというやましさがあったのでしょうか、はじめのうち、アキレウスはあまり戦いに熱心ではありませんでした。そのうち大将のアガ멤ノンと女奴隷のことで諍いになり、戦闘への参加を拒否して後方にしりぞいてしまいます。そのアキレウスがどうしてふたたび戦場に出、獅子奮迅の働きをして敵の猛将ヘクトルを討ち取ったのか、そして彼自身どうして花の命を散らすことになったのか、それはまたのちのお話としましょう。

オデュッセウス（G）

オデュッセウスがアキレウスの説得に成功したのは、ひとつには彼もまた、はじめのうち戦争に参加したくない、と思って、勧誘を避けていた経験があり、アキレウスやテティスの気持ちに一定の理解を持つことができたからではないか、と思われます。

ヘレネの身になにか起こったら、かつての求婚者は救出に一致協力しよう、という盟約を提案したのはオデュッセウスでした。しかし、実際の誘拐が行われたとき、彼自身はペネロペという愛妻を迎えて、幼い子供をもうけたところでした。戦争に出れば当分は家に戻れない、いや永久に戻れないかもしれない、ということを彼はよく知っていました。それに、たかが女ひとりの不倫のために戦争まですることはあるまい、という醒めた気分も働いていました。みんな、もう少し冷静になればいいのに……。

勧誘にやってきたのは、パラメデスというアガ멤ノンの家来でした。「共同作戦の提案者が不参加では困る」と言いに来たのです。この理屈はオデュッセウスにも反駁できないように思われました。そこで、彼は気が狂ったふりをしてこれをおかしく思い、畑に出て、塩と砂を混ぜたものを、種と思い込んだふりをして蒔いていました。パラメデスはこれを見て驚きましたが、オデュッセウスが幼い子供を非常に可愛がっていることを思い出し、子供を使って彼を

試そうとしました。

籠にいた赤ん坊が畑に置かれ、そこへ鋤をつけた牛が突き進んでくるのを見て、オデュッセウスはわれを忘れて息子を抱き上げました。これで彼が正気であることがばれてしまい、ギリシア軍はオデュッセウスというかけがえのない戦力を獲得することができたのです。

しかし、このように卑劣なやり方で戦争に引っぱりこまれたことを、オデュッセウスは内心深く根に持っていたようです。のちに戦場へ出てから、パラメデスに濡れ衣を着せて、戦線から放逐するよう仕向けたのはこのためです。けれども、いったん戦列に加わったからには全力を尽くしてギリシア軍を勝利に導こうとしたことも事実です。あとでお話する「トロイアの木馬」の策略も彼のアイディアでした。一日も早く妻と子の待つイタケ島へ帰りたいという思いが、かえって彼の戦意を支えて戦局を有利に導く結果となりました。

それほど恋しい妻子のもとへ、ようやく戦争が終わってから、オデュッセウスはなかなか帰ることができませんでした。海神ポセイドンの恨みをかって、あやうく命を落とすところを何度もアテナに救われ、冥界にまで赴き、海の女神カリュプソや美しい少女ナウシカに愛されてもなお、ペネロペへの愛を守って冒険に冒険を重ね、乞食姿でイタケ島に戻ってくるまで、ついに10年の歳月が流れました。ホメロスの『オデュッセイア』は、この冒険の物語です。

ヘクトル（T）

トロイアの領主プリアモスの第一王子ヘクトルは、老齢の父にかわって軍の総指揮を取り、9年の間、ギリシア軍をその城下に寄せ付けなかったばかりか、しばしば波打ち際まで後退を余儀なくさせた、トロイア軍最大の勇者です。弟のパリスがとすると戦場を抜け出してヘレネとの逢瀬を楽しもうとする臆病者のきらいがあったのに対して、ヘクトルはそんな弟を叱咤激励し、みずからつねに最前線に立ち、兵士の模範となって戦いました。

彼にも、オデュッセウスに負けず愛してやまないアンドロマケという妻があ

りました。この妻が夫との間にできたアウテュアナクスという幼い息子を抱いて、夫を戦場に尋ねてくる場面がホメロスの『イリアド』のなかにあります。甲冑に身を固めた父親の姿におそれをなして幼児が泣き出すと、ヘクトルは笑って、叱らずに息子を乳母の腕に返してやり、妻に向かって、

「さあ、もう家にお帰り。機を織るなり、糸引き車を回すなり、お前に任されている大事な仕事を、安心してやっているがいい。戦のことは男が引き受けた。第一番にこのヘクトルが、な」

と言います。武勇だけでなく、常識を兼ね備えた、頼もしい人柄を感じさせる、印象的な場面です。

パリスがヘレネを連れてトロイアに帰ってきたときも、ヘクトルはただひとり、この振舞いを良しとしませんでした。「夫のもとに返すべきだ」と主張したのです。この主張は通らなかったのですが、だからと言って、ヘクトルはヘレネに辛くあたるようなことはしません。戦争が長びいてトロイアの人々がヘレネの存在を快く思わなくなっていくときも、弟嫁をかばって、不愉快な思いをさせないように、よく気を遣っています。戦争さえなかったら、トロイアを中心に小アジアは彼を盟主として大きく発展したことでしょう。

トロイア戦争は、実はギリシアがトロイアの繁栄とその元になっている豊富な資源を羨望し、これを奪う目的で起こしたという見方もあります。どうやら真の原因はこちらの方にあったのでしょう。ヘクトルはそれを見越して、ギリシアとことを構えないようにしようといろいろ配慮した形跡があります。しかし一度戦端が開かれてしまえば敗北は許されないと、総大将を引き受けたのです。

事実ヘクトルが討ち死にしてから、頭を失ったトロイア軍は戦略を立てて戦うことができなくなり、籠城に追い込まれて次第に敗色を深めて行きました。最後は謀略によって潰されるわけですが、このときもヘクトルさえ健在だったと、悔やまれることしきりです。運命とはいえ、惜しい人物をなくしたものですね。

アイネイアス（T）

アイネイアスは、トロイアの創始者トロスの子孫で分家を継いだアンキセスの子です。アンキセスは美貌の青年だったので、アプロディテの目にとまり、パリスのようにイダの山中で羊飼いをしているところへ人間の娘の姿をした女神が現れて、恋をしかけたのです。だからアイネイアスはアプロディテの子供なのですが、このことは秘密にするよう、アンキセスはきつく申しわたされ、アイネイアスはニンフに育てられました。5歳のとき父のもとに戻され、父はトロイア落城まで息子と一緒にいました。つまり彼が育った家庭は父子家庭だったのです。長じてはプリアモス王の娘のひとりと結婚して、彼自身アスカニオという男児をもうけました。

分家の出身ということで、トロイア軍のなかでも首都ではなく、イダ山の中腹にあるダルダニアの町に陣を張り、ダルダノス軍の指揮官となってアプロディテの庇護のもとに善戦しました。しかし末期はアキレウスに攻め立てられてトロイアに移り、ヘクトル亡き後の軍をまとめて城下にせまる敵と戦いました。名実ともにヘクトルに次ぐ名将だったといえましょう。

しかし、むしろ彼の名はトロイア落城とともに有名となります。炎に巻かれるトロイアの町を、足の悪い老父を背負い、幼いわが子の手を引いて脱出していく、まさに近代戦の空襲・空爆下を連想させる絵柄は、後世の画家たちが題材にしています。この避難の最中に、妻のクレウサは煙に巻かれて行方知れずとなり、引き返して捜そうとする英雄にその亡霊が現れて、「わたしはもうこの世にはおりません。早く逃げてください」と告げるのです。

そのような経緯は、オウィディウスと肩を並べる古代ローマの大詩人ウェルギリウス（BC70－19）によって語り残されたものです。ウェルギリウスが活躍した時代は、ローマ文化が絢爛たる花を咲かせ始めた時代でした。宮廷詩人はローマ建国の神話化を任務として引き受け、ホメロスの『オデュッセイア』にならって、『アエネアス』という叙事詩を書き上げます。トロイア陥落後、この英雄が一族の生存者を率いて航海し、さまざまな島を巡ってついにイタリアに

上陸、ラティニ人の娘と結婚して新しい民族の基礎を築くまで、アプロディテをはじめとする神々の加護を受けながら、言葉に尽くせない苦難を乗り越えて行く一大冒険譚です。戦火のなかを逃げていく場面は、その冒険のはじまりのところに語られています。

つい戦争の終局に話が飛んでしまいましたが、この辺で少し趣向を変え、敵味方一組にした戦闘場面を、ふたつばかり紹介することにしましょう。当時の戦争はちょうど日本の『平家物語』のように、武将同士の一騎打ちがよく行われたようなので。

パリス（T）vs メネラオス（G）

ヘレネを挟んでこのふたりの対立が戦争の発端であったわけですから、戦場で両者が相見えることになったのは当然のことです。それも、ギリシア軍がトロイアの海岸に上陸し、両軍がはじめて対峙したとき、まっさきにそれは行われました。

お互い敵の陣営に憎い相手の姿を認めたとき、メネラオスは欣喜雀躍、すぐさまパリスのところへ歩を進めようと、はやる気持ちをおさえかねていましたが、パリスの方は反対に見るより蒼くなって、仲間の兵士たちのかげにかくれてしまいました。これを見たヘクトルが「なんだ、この腰抜けめ。おまえのせいで戦争になったというのに、その情けないさまは」と、罵ったのです。

そう言われては、パリスも引っ込んではいられません。ここで覚悟を決め、「わたしもアレクサンドロス（パリスの別名、人類を守る者の意）と呼ばれるトロイアの王子です。これはメネラオスとわたしの個人的な問題に発したことから、まずここでわたしたちに一騎打ちをさせてください。ヘレネを的に、正々堂々と戦いますから、両軍ともに、手を出さないで見ていてください」

そう、きっぱりと言ってのけました。このことをヘクトルが大声でギリシア方に伝えますと、メネラオスがこれを聞いて、味方に向かって言いました。

「わたしの気持ちも彼と同じだ。わたしらふたりの身勝手な争いのために大勢に難儀をかけていることは、申し訳なく思っている。ここでふたりが決闘すれば問題の決着はつくのだから、戦争などしなくてすむ。どちらかが死んだら、生き残った者がヘレネを連れて国へ帰ればよいのだ」

そこでアガメムノンが、この旨をトロイア方に伝え、両軍の将兵は戦車から降りて、この果し合いを見守ることになりました。

まず、槍の投げあいから、この命がけの競技はスタートします。パリス先攻。振りしごいた槍をメネラオスめがけて投げつければ、槍は盾にあたってこれを突き破ることができず、失点。メネラオスが、ゼウスに必勝を祈ってから投げた槍はパリスの盾を突き破り、美々しい鎧の胸当まで貫いて脇腹に達しようとするところをパリス、あやうく身をひねってこれをかわしました。肌着に切り裂いた跡が残ったというのですから、ほんとに危ないところでした。

メネラウスが駆け寄って、白銀の鋌を打った剣を抜きざま、パリスの面を発止と打つと、白馬の尾飾りをなびかせた兜に当たって、剣はこなごなに砕けてしまいました。

「ゼウス、あなたは無残な方だ。悪事を働いたアレクサンドロスに思い知らせてやろうとしたのに」

と叫ぶと、メネラオスは素手でパリスの兜の尾飾りをむんずと掴み、ギリシア軍の方へ引きずって行きました。兜の締め緒となっている顎紐が若者の首をぐいぐい締め付け、もう絶体絶命と思われた、その時でした。

海の方から霧が出てきました。それが全軍を覆って何も見えないようにして行きました。その霧にかくれて、女神アプロディテがパリスの兜の緒をゆるめ、彼を攫^{さら}ってイリオンの館の、ヘレネのいる奥の間へ運んでしまったのです。

急に手が軽くなったまま、兜を握り締めていたメネラオスは、その中身がすっぽり抜けてしまったことに、驚き呆れましたが、ともあれ試合はメネラオスの判定勝ちは確実と思われ、勝利宣言をしようとしたまさにそのとき、トロイアの陣営から矢が飛んで来ました。休戦協定破棄のしるしです。これをきっかけにトロイア戦争の火蓋は切って落とされたのでした。

ディオメデス（G）vs グ라우コス（T）

ディオメデスはかつてヘレネの求婚者のひとりでしたので、盟約を守ってアルゴスというところから黒塗りの船 80 艘を率いて参加しました。そして、槍で敵将アイネイアスに手傷を負わせ、ついでにこれを助けに來たアプロディテの手首も、ちょっと突付いて「女神様、あなたの出る幕ではない、おさがりなさい」と言ってオリュンポスへ追い返しました。軍神アレスまで同じように追い返したと言いますから、この人の強さは並大抵ではありません。

一方のグラウコスは、リキュアという小アジア半島の南岸にある地方からやってきました。ギリシア側もそうですが、トロイア側もこうした周辺の国々から援軍が集まってきて連合軍を構成していました。連合軍のリーダーがこのグラウコスで、武勇の誉れ高く、この戦で名だたるギリシアの勇士と一戦交えるのを楽しみにしていました。ディオメデスの名声は小アジアにもとどろいていたので、他の助っ人連中は、アイネイアスに手傷を負わせた彼の武勇伝をきいて、おそれをなして逃げ出してしまいましたが、グラウコスはひとり踏みとどまって、敵将が現れるのを待っていました。

それを見たディオメデスは、敵ながらあっぱれと感服して大声で話しかけました。

「失礼だが、おうかがいしたいものだ。君はそもそもいかなるお人か。地に長々と影を引くわが槍を待ち受けておられるとは」

「お答えしよう。われこそは……」

よくぞ訊いてくださったとばかり、ここでグラウコス、ながながと自分の家系について語り、最後をこうしめくくったのです。

「由緒正しきヒッポロコスの子グラウコス、ここにあり」

これを聞いたディオメデスは上機嫌になりました。彼のおじいさんにあたるオイネウスという英雄がヒッポロコスのお父さんと友情を結んでいた間柄だったからです。

「これは奇遇だ。君の祖先とぼくの祖先は友人同士。それならここで果し合い

などすることはない。友情のしるしにここでお互いの武具を交換して、直接試合はやめようではないか。なに、お互い、戦うべき相手はほかにたくさんいるさ」

グラウコスもこれを聞いて嬉しくなり、ふたりは鎧兜を脱いで、握手とともにこれを交換し、先々までの友情を誓い合いました。

激しい戦闘の合間には、こんなこともあったのです。ただしホメロスは、この交換で得をしたのはディオメデスだ、なぜならグラウコスが身につけていたのは黄金製の武具で、ディオメデスのは青銅製だったから、と言ってグラウコスのお人よしさを笑っていますが。

さて、ここでまた少し趣を変えて、戦闘には加わらないが重要な役割を果たした人たちのことをお話したいと思います。ギリシア方から賢者ネストル、トロイア方からは女予言者カッサンドラのことを。

ネストル（G）

いまお話しした一騎打ちの話は、ふたつともどこかのんびりとしていて、戦争を楽しむようなところがないでもありません。事実、はじめのうちはそのようなものだったかも知れないのですが、そのうちだんだんと、決着のつかない戦争にみんな飽きて来ました。それからオデュッセウスとパラメデス、アキレウスとアガメムノンのように内輪もめもよくあり、総大将のアガメムノンは寄り合い所帯であるギリシア軍をひとつにまとめるのに苦労していました。

そういうときアガメムノンを助けて良き参謀役をつとめたのが、このネストルです。年齢はもう90歳近かったと思われますが、適切な判断力と経験を活かして、進むべき道を総大将に教え、とるべき策を授けました。たとえばこんな風に、です。

アキレウスがアガメムノンと喧嘩して戦場を離脱していた時期のことです。アガメムノンは夢を見ました。ゼウスが現れ、ぐずぐずするな、早く城を総攻撃

せよ、と命じたのでした。目が醒めてから主だった武将たちにこの話をしますと、皆総攻撃案に賛成だったのです。

しかし末端の兵士たちに十分な戦意があるかどうかは勝敗の決め手となる、と考えたアガメムノンは、わざと心にもない嘘を言ってこれを試そうとしました。「これだけトロイアを攻撃してもだめなのだから、もう諦めて国へ帰ろうかと思うが、どうだ」と、全軍を集めて言ってみたのです。

すると兵士たちは予期に反して歓声を上げて喜び、雪崩を打ったように、船を停泊させてある海辺に向かって走り出しました。戦争が始まってからすでに9年を過ぎていました。遠い異国での苦しい戦いのあけくれに、彼らはもううんざりしていたのです。

このとき彼らを押しとどめ、戦いに立ち戻らせたのはオデュッセウスとネストルでした。オデュッセウスは、ギリシアを発つまえにした必勝祈願と、その折のカルカスの予言——「9羽の鳥を呑みこんだ蛇」をみんなに思い出させ、ようやくその苦難の9年は過ぎた、これから勝利を約束された10年目にはいるところで、獲物もなしで国へ帰ろうなどと、愚かなことを考えるな、とさしました。

ネストルは、もっと精神的なことを説きました。「兵士として軍との間に結んだ盟約、神前で誓い、信義の証し、そういったものをないがしろにしては、アカイア（ギリシアの別名）の武士の名が泣くだろう。しっかりしろ」と言ったのです。それだけでなく、アガメムノンに対しても、重要な進言をしました。

「アトレウスの子よ、せめてあなたはどうかこれまで通り、ゆるがぬ信念を持って、断固として指揮を取ってください。兵士の戦意を高めるにはよい方法がある。兵士たちを部族ごと、仲間ごとに組分けするのです。仲間は仲間を、部族は部族を助けて、功を競うようになるでしょう。またそうすれば、指揮を執る者、戦闘を行う者の誰が勇敢で、誰が卑怯者か、一目でわかるようになるでしょう。たとえトロイアの城が落ちなくても、それが神意なのか、武士たちの弱さによるのか、間違った判断のためか、はっきりすることになります」

これによってギリシア軍は、それまでの個人的な功名争いとは異なる、ひと

つの目的に統一された複数の戦列を持つ、近代的な軍隊を編成することになりました。この大きな戦術転換が、10年目の戦いを決定的勝利に導く要因となるのです。

カッサンドラ（T）

トロイア側の不幸は、こちらにネストルがいなかったことだと言ってもよいのではないのでしょうか。トロイア軍の戦いぶりはみごとでした。同族同士の結束は固く、近隣から集まった連合軍も、小アジアの土地を荒らす外敵の侵入には一致して戦うという明確な戦争目的がありましたから、ギリシア軍のように内輪もめを起こすようなことはなく、ヘクトルの指揮のもと、無駄のない戦いを展開できたのでしょう。しかし、のちに述べる凄絶な戦闘でヘクトルが討たれてしまった後、トロイア軍はがたがたになってしまいます。智謀、武勇、良識、判断力を一身に兼ね備えたヘクトルという中心があつてこそその戦いだったのです。それは言い換えればこの戦がヘクトルというひとりの天才的な人物によって行われた孤独な戦いだった、ということです。せめてひとりでも彼の相談に応じたり、彼に見えていないものを指摘してくれたりするブレーンの存在があつたら、戦局の展開はもっと違ったものになったのではないかと、その点、オデュッセウスやネストルに支えられたアガ멤ノンとくらべて、この孤独な総大将は不幸だったと言えると思います。

トロイアに、もう少し先の読める戦略家はいなかったのでしょうか。じつは、そもそものはじめから最後の敗北にいたるまで、すべてを予見し、警告を発し続けていた人物がいました。ヘクトル、パリスの姉カッサンドラです。

プリアモスとヘカベの子に生まれたカッサンドラは、類まれな美貌の持ち主でした。そのためにアポロンが、彼女をみそめ、求愛しました。このとき彼女は「恋人になってくれたら、未来を予知し、予言する能力をあげるよ」と、この神託を司る神様に言われ、彼を受け入れると約束しました。ところが、いざというときになって、彼女は怖くなってしまったのです。「ギリシア神話」に出

てくる乙女たちのなかには時々こういう清純派がいます。神様にもアテナ、アルテミスというお手本があるからでしょうか。誰が見ても非の打ち所のない、美男で家柄がよくて、秀才で、スポーツ万能で……その上神様でもあるアポロンがまたどうしてかこういう清純派の美女に拒否されることが多いのも、「ギリシア神話」の面白いところです。マルシユアスの例でも見る通り、この神様は反抗には罰を与えますから、そうした美女たちは、多くが植物に姿を変えられています。

カッサンドラはそうはされませんでした。また、すでに与えてしまった予言・予知の能力は、アポロンとしても、これを取り上げるわけにいかないのです。そこでこういうことになりました——カッサンドラの予言は正しく未来を言い当てる。だが、誰もそれを信じない。

予言をするとき、彼女は一種の神懸り状態になります。それは他人からは錯乱しているとしか見えません。言うことを信じてもらえないと、ますます言い方はヒステリックになり、ますます人は信じなくなります。

山から降りて来た羊飼いの少年を、弟のパリスだと一目で見破ったのは彼女でした。だから彼がギリシア親善旅行に出かけると言ったとき、「ギリシアへ行ってはいけない」という、この恩ある姉の忠告に耳を傾けてもよかったのに、弟はそうしませんでした。ヘレネを連れて帰ってきたときもそうです。このためにトロイアに降りかかる災いを予言しても、人々はまともにそれを受け止めませんでした。戦争が起こってから、彼女は重要な予言、予告をたくさんしています。しかし信じてもらえない運命にあるカッサンドラの予言はただの一度も功を奏することなく、虚空に消えてしまいます。これはトロイアにとっても彼女自身にとっても、この上ない不幸だったと言えるでしょう。

トロイア落城のとき、アテナの女神像にすがって命乞いをするカッサンドラを、ギリシアの小アイアスと呼ばれる武将が、背後から強姦しました。神像は倒れて、その有様を見まいと、目をそらしていたと言われます。

このときまで、アプロディテと林檎を張り合ったアテナは完全にギリシア軍の味方だったのですが、この瞬間から、その好意は冷めはじめたと言うことで

す。処女神アテナに対する冒涇の行為として、女神の怒りを買った小アイアスはトロイアからの帰途、雷に撃たれて死にます。そのほかギリシア軍が蒙った遭難は、すべてこのアテナの怒りによるものだと言われています。

◆ トロイア陥落まで

さて、それではいよいよ、長引く戦争を凄絶な殺し合いに変える転機となったアキレウスの参戦の経緯からトロイア陥落までを、いっきよに物語ることにいたしましょう。先の表に出ていたパトロクロス（G）とヘレノス（T）はこのなかで重要な役割を果たすことになります。

勇士の死——パトロクロス、ヘクトル、アキレウス、そしてパリス

夢でゼウスにうながされた総攻撃は、すぐには成功しませんでした。トロイア側にはアポロンが味方につき、ヘクトルの前に立って軍勢を率い、ギリシア軍をついに船のある海岸にまで後退させてしまったのです。オデュッセウスもディオメデスも深い手傷を負っていました。まさにギリシア軍にとっては最大の危機が訪れていたと言えます。

その頃、後方で豎琴をかき鳴らしながら、戦いの様子をひとごとのように眺めていたアキレウスのまえに、幼友達で無二の親友であるパトロクロスが、膝まずいて涙を流しながらこう言っていました。

「頼む。戦場に出てくれ。アカイア軍は危機に瀕しているのだ。アキレウスの姿さえ現れれば、敵は必ず恐れてしりぞく。さもなくば、せめてこのわたしに君の鎧兜を貸してくれ。君だと名乗って戦場に出て敵を追い払ってみせる」

アキレウスはこのとき、もう戦線を離脱して故郷に帰ろうという気持ちが固まりかけていましたので、みずから戦場に赴くという気にはなりませんでした。しかしパトロクロスのたつての頼みに、しぶしぶ武具を貸し与えることは承知しました。ただし船陣のところから敵を追い払ったら、そこまでで、決して深

追いはしないように、と、釘をさすのを忘れずに。パトロクロスはアキレウスの武具を身につけ、アキレウスの配下の軍勢を率いて、勇躍海辺をめざして出て行きました。

アキレウスの威力というのはたいしたもの。すでに船には火が放たれていたにもかかわらず、トロイア勢は総崩れとなりました。それを追ってパトロクロスは攻撃の手をゆるめませんでした。トロイア軍の勇将サルペドンをその槍で倒すと、勢いを借りてさらに敵勢をイリオスの城下まで追い詰めて行きました。アキレウスの忠告はどこかに置き忘れていました。

サルペドン倒れるの知らせに、グラウコス、アイネイアスらのトロイア勢は結集して敵勢を迎え撃ちます。それを蹴散らして、城壁に手を掛けたパトロクロスの前にヘクトルが姿を現します。その背後には、濃い霧に身を包んだアポロンが付き添っていました。ヘクトルの槍はパトロクロスの下腹に突き刺さり、彼は敢えない最期を遂げたのです。

この知らせがアキレウスのもとに届いたとき、激しい後悔の念が彼を捉えました。地に伏し^{まろ}転び、髪をかきむしって慟哭したと伝えられています。

「もう生きて帰ろうとは思わない。是が非でもヘクトルを倒して友の仇を討つ」

そう言って、母のテティスに新しい鎧兜を拵えてもらい、それに身を包んで、渚伝いにギリシアの船陣に向かいました。傷を負っていたアガ멤ノンがこれを出迎え、ふたりの間に和解が成立します。高らかに響き渡るアキレウスの呼び声に、兵士たちはぞくぞくと集まりました。おりしも吹きすさぶ北風のもと、雪片が絶え間なく降りかかるなかを、トロイアの城目指して進軍が開始されました。

城下にいたるまでに、アキレウスはどれほどの殺戮を行ったか、計り知れません。スカマンドロス川の水は彼に殺された兵士で埋め尽くされ、流れが堰き止められてしまったので、彼は河神のスカマンドロスとも戦い、逆巻く波に揉まれながらも、諦めずに進軍を続けました。ついに城下に達するとその姿を見て、老王プリアモスは門の外にいたヘクトルに、急いでなかにはいるよう呼びかけました。ヘクトルは応じません。アキレウスが自分ひとりを目指してやっ

てきたことを知っているからです。

しかし、勇猛さではひけをとらないはずのヘクトルも、このときのアキレウスを包んでいるすさまじい怒気には圧倒されました。逃げ出したのです。それを追いかけるアキレウス。ふたりは3度城門の周りを回りました。4度目に、諦めてヘクトルは対決の姿勢に転じ、あっという間に勝負は決しました。咽喉もとに深く突き刺さった槍が、猛将ヘクトルの命を奪ったのです。トロイアの希望の星はこうして消えて行ったのでした。

無敵と見えたそのアキレウスが、予言通りトロイアの野に短い命を落としたのは、兄を討たれたパリスの手によってのことです。白兵戦は得意としないパリスですが、彼は弓矢の名手でした。トロイア軍の保護者アポロンは、彼にアキレウスの持つ唯一の弱点を教えたのです——「踵を狙え」と。

パリスの矢が致命傷を与え、アキレウスは死を迎えました。臨終の床で彼が残した遺言によって火葬に付された彼の骨は、パトロクロスの骨と混ぜて、遠くギリシアを望む海辺の墓に葬られたということです。

その後のことになりますが、パリスもまたあとから参戦した弓の名手ピロクテテスの毒矢に倒れます。ヘレネを残して戦場の露と消えるのは、彼に定められた運命だったのです。

ヘレノス（T）の裏切り

ヘクトルとアキレウスがともに倒れたのちも、まだまだ戦争は続きました。アイネイアスははじめトロイア側の武将たちはイリオスの城にはいて、籠城作戦を取っていました。ギリシア側はディオメデス、オデュッセイア、さらにアキレウスの従兄弟にあたる大アイアスなど、まだまだ勇将が残ってはいましたが、なんといっても勝利の象徴であるアキレウスがいなくなってしまうとは、士気もあがらず、城にこもる敵を攻めあぐねていたのです。

この頃、ある時期のアキレウスのように、トロイア方にも、戦闘に加わらずに醒めた目で戦争の成り行きを見ていた人物がありました。プリアモスとヘカ

べの正当な子で、あのカッサンドラと双子の兄弟にあたるヘレノスという人です。この人には、カッサンドラに似た未来予知の能力が備わっていました。カッサンドラと違うところは、神懸り状態になって託宣を述べるのではなくて、占筮術すなわち占いが得意だったということです。鳥の飛ぶ方向によって敵の所在を知る、といった論理的な思考のできる人であったようです。

彼はパリスのギリシア行きにも異議を唱えていましたし、戦争が始まってからも、なるべく有利な条件で戦争を終結して、ヘレネをギリシアに帰した方がいいと思っていたようです。しかしおとなしい性格だったので、自分から意見を言うということはあまりなかったのでしょう。ヘクトルが死んだあと、未来はないとわかっている戦いになおも意地になってしがみついている同胞たちに愛想をつかして、イダの山中に隠れ、ひとり平和に暮らそうとしたのでした。

ギリシア方の占筮術師カルカスがこれをつきとめ、捕らえるようにオデュッセウスに進言しました。どうすればトロイアの城が落ちるか知っているのは、このヘレノスだけだ、という卦が出ていたからです。

オデュッセウスは彼を捕らえて詮議しました。

このとき、どうしてプリアモスの正当な嫡子が同胞を売るような情報を敵に与えたのか、その理由はよくわかりません。一説にはパリス亡き後、ヘレネが自分でなく、弟のディポボスに与えられたのを不服としてのことだ、と言われていますが、そうするとパリスの死の原因となるピロクテスを戦場に招くことを進言した彼の予言は時間的におかしくなります。やはりこれは、戦争終結を早く願っての一種の取引、和平工作だったと解釈する方がよいのかも知れません。ただギリシア側が開戦当時のような信義をわきまえた武士でなくなっていたことが、彼の誤算だったのではないのでしょうか。あるいは自分や姉のカッサンドラの言うことを信じないトロイアの人々にくらべて、他人にない能力を高く買ってくれるギリシア側の申し出に、自尊心をゆすぶられたのかもしれない。

ともあれヘレノスはトロイア陥落のための3つの条件をギリシア方に教えました。①トロイアの守り神パラス・アテナのパラディオンの像を盗み出すこと。

②ギリシア軍がトロイアへ来る道で、ある島に置き去りにしてきたピロテテクスを参戦させること。③アキレウスの子ネオブトレモスを参戦させること。

木馬の計も彼の進言だという説もありますが、私はこれを取りません。そこまでしてはヘレノスが可哀そうだと思います。戦後彼はヘクトルの妻アンドロマケとともに、ネオブトレモスの奴隷となりますが、その後許されてギリシアの奥地にトロイアに似た小都市を作りました。イタリアへ渡るまえ、アイネイアスがこの町を訪ねて感動する話が『アエネアス』に出てきます。たしかに祖国の敗因の一端は彼の裏切りにありますが、彼は彼なりに、トロイアを愛したのだと解釈できないでしょうか。

パラディオンの像と木馬

裏切ったのはヘレノスだけではありませんでした。パリスの死後ディポボスの妻となることを強いられたヘレネも、この頃になると生まれ故郷や幼馴染、そして自分のために命まで投げ出して戦ってくれるメネラオスはじめギリシアの武将たちに対する思いに、抗しきれなくなっていました。それだけでなく、ギリシア方は城を攻め落とすことしか考えていないので、その際ヘレネを生きたまま奪還するために、なんとかしてヘレネと連絡を取る必要があり、そのための工作を積極的に行ってもいたのです。

ある夜、乞食姿に身をやつしたオデュッセウスがディオメデスを連れて城壁にしのび寄り、ディオメデスの肩車に乗って、かねて目指しておいた低所から、城内にはいりました。これを手引きしてバラス・アテナの神殿——カッサンドラが犯されるのとは別の神殿——に案内したのがヘレネです。プリアモスはヘレノスの警告に従って、いくつもの模型を作って万に備えていましたが、ヘレネによって真正な像を見つけ出すことができたのです。

木馬の計のお話は有名ですからご存じの方も多いことでしょう。これを考え出したのはオデュッセウスだというのが一般的な説ですが、その背後にはギリシアに肩入れするアテナの指示があったようです。イダの山から伐りだした材

木で巨大な木馬を作り、その胎内に50人とも100人とも言われる兵士をしのびこませて、夜のうちにそれを海辺に置いたまま、ギリシア軍は残りの将兵をこぞって船に乗せ、沖合いに出て待機しました。

朝になりました。海辺の様子があまりに静かで、いつもと違うのに気づいたトロイアの人々は、空になったギリシア軍の陣地に、この巨大な木馬が放置されているのを見てびっくり仰天しました。近寄って見ると「故郷へ帰還するにあたって、感謝のしるしとして、この木馬をアテナの女神に奉納する」との銘が記されています。それでは、ギリシア軍はどうとう戦いに飽きて引き揚げたのか、われわれは勝ったのか、海辺にはどよめきが起きました。

さあ、木馬を城に引き入れよう、とみんな総出で曳き出そうとしたとき、「待った」がかかりました。アイネイアスの叔父にあたるラオコーンというアポロンの神官でした。

「ギリシア人からの贈り物を軽々しく信じてはならぬ。なかに何がはいっているか、わからないではないか」

と言ったのです。カッサンドラも出てきて、「その胎内には軍勢が潜んでいる」と叫びました。人々の間に不安が広がりはじめました。それを受けて、ラオコーンは木馬の脇腹に槍を突き刺したのです。しかしアテナの加護によって、槍はなかにいる兵士には達しなかったので、木馬からは声ひとつあがりませんでした。そのかわり、海の向こうから白波を蹴立てて2匹の大蛇が泳いできました。そしてまっすぐにラオコーンのところへにじり寄り、そばにいたふたりの息子も含め、彼らに巻きつくつと、みるみる締め殺してしまったのです。皆さんはローマのヴァチカン美術館にある『ラオコーン群像』という彫像を、写真でなりとご覧になったことがおありでしょう。あれは紀元前1世紀頃の作品とされていますが、まさに神官とその子供たちが大蛇に巻きつかれる瞬間を捉えて迫真にせまるものがあります。

思わぬ展開に驚いているトロイア人の前に、こんどはギリシア人がひとりやってきました。シノンという名で、もちろんギリシア側のデマゴグとして送り込まれた人物です。

「とんでもないことをなさるところでしたな。もしこの木馬を壊せば、アテナはギリシア軍を呼び戻してトロイアを陥落させておしまいになりますよ。早く木馬を神殿にお運びなされ。アテナは町を守ってくださいますよ」

ギリシア軍はどこへ行ったのだ、と訊くトロイア人に、シノンは答えて、
「ご承知の通り、アカイアの陣営には争いごとが絶えなくて、な。せんだつても、あの武辺者の大アイアスが、アキレウスの遺品のことでオデュッセウスと争って、錯乱して、な。豚やら羊やらを兵隊どもと間違えてぶっ殺した末に、正気に戻って、わが身を恥じて自殺しましたよ。そんなこんなで嫌気がさして、アガ멤ノンが帰還を決意するにいたったというわけ……もうとうに船隊はギリシアを目指して航海しておりますよ」

と、まことしやかに述べ立てたのです。

長い戦争に飽きていたのはトロイアも同じこと、人々は大喜びでこの流言を信じ、総がかりで木馬を城内へ曳き入れ、まずはプリアモスの館の近くに据えました。

その夜、イリオスの町は沸き返る喜びに包まれました。とりわけ城のなかには饗宴につぐ饗宴、歓呼につぐ歓呼、笑いとかと踊りの賑わいを尽くし、明け方近く、完全に酔い潰れて眠りに落ちました。

木馬の蓋を開いて兵士たちが飛び出しました。と同時に、城壁から海に向かって松明が振られ、それを見て夜のうちにじりじりと岸边に近づいていた船団がいきよに接岸、上陸を開始しました。やがて内外呼応して城門を開き、王宮に突入します。オデュッセウス、ディオメデス、メネラオス、ネオプトレモス（アキレウスの遺児）の面々です。来る道筋で一方向的な殺戮と略奪を行い、血煙をあげながら進入したのでした。

まずネオプトレモスが、ゼウスの祭壇にすがるプリアモスを斬って捨てます。メネラオスはまっすぐにヘレネの寝所を襲い、ディポボスを刺し、ヘレネを船に連れ帰ります。小アイアスがカッサンドラを犯したことは前に述べました。

王家の男児は子供にいたるまでことごとく殺され、市中は略奪の末、火が放たれました。母神アプロディテから予告を受けたアイネイアスだけが、老父と

幼子連れ、火災を逃れて城外へ出ることができたのです。このときのギリシア軍の蛮行、残虐さは、筆舌に尽くせないものでした。それまでギリシア軍の手厚い保護者だったアテナが、怒り心頭に発し、帰途についた彼らに次々と不運をもたらすようになったことでも、その無道ぶりがわかります。こうして小アジアの宝と言われたトロイア王国は完全に滅亡し、繁栄を誇った都は廃墟と化したのです。

シュリーマンが発掘し、その後多くの学者たちによってさらにその構造が確かめられてきたトロイアの遺跡は、いまま瓦礫の山だということです。その瓦礫は、どんなに装いをこらしても、戦争とは大量殺戮と破壊でしかないことを、われわれに教えているのではないのでしょうか。

◆ トロイアの女たち

トロイアが陥落したとき、男子は皆殺しにされましたが、女子はひとまとめにしてテントに押し込められ、全員奴隷としてギリシア軍の将士に分配され、知らぬ異国で生涯を終えることになりました。子供たちは母親から引き離されて、その後ひとり残らず殺されました。「ギリシア神話」のなかでも、このときのトロイアの女たちほど、戦争のもたらす悲惨さ、その無残さを、身をもって表しているものはありません。彼女らはすべての人間が経験する戦争の悪を代表して身に受けているように見えるほどです。ギリシア古典悲劇3大詩人の最後を飾るエウリピデス（BC485?－406?）は、これらの女たちを一堂に集めて、その引き裂かれる胸のうちを生々しく伝える『トロイアの女たち』という戯曲を書きました。今日でも、世界各地で繰り返し上演されている不朽の名作です。

エウリピデスには及びもつきませんが、私も彼女らの悲しい運命を語ることで、「トロイア戦争」のお話を締めくくりにしたいと思います。

プリアモス王の妃ヘカベは、ヘクトルが死んで形勢が不利になってきた頃、トロイア王家の血筋を絶やさないために一計を案じました。末の息子ポリュドロスを、北の隣国ポリュメストル王のところに、莫大な財産をつけて預けたので

す。もしトロイアに万一のことがあったら、その財産で、成人した王子が国を再興させられるよう、それまでかくまってほしいと、ポリュメストル王の人柄を見込んで、くれぐれも頼んでおいたのです。

トロイアが落ち夫が惨殺されたあと、テントに入れられているときもヘカベはこの王子に希望をつないで心の平静さを保っていました。そこへ思いがけない知らせが届きました。ポリュドロス王子が、死体となって海にうかんでいる、と言うのです。

急いで行って見ると、まさしくわが子、ヘカベは気を失うほど驚きました。ポリュメストル王は預けられた財宝に目がくらみ、独り占めにしようと王子を殺して海へ投げ捨てたのです。流れ流れて故郷に漂着した王子の遺骸は、なんとかこれを母に伝えたかったのでしょう。

囚われの身となったとは言え、トロイア王国の王妃です。復讐を計画します。こっそりポリュメストル王に手紙を出して、王子の死を知っていることはおくびにも出さず、逆に「隠し金の在り処を教えたい」と言ってやりました。

欲深のポリュメストルはこのこやってきて、テントにはいりました。

そこを、テントのなかにいた女性たちがいっせいに襲いかかり、王の両眼を潰してしまいました。

しかしヘカベの不幸はそれだけではありません。つぎは娘のポリュクセネです。戦争も初期のころは、まだのんびりとしたところがあった、と前に言いましたが、そういう時期のこと、アキレウスがこの乙女をみそめて結婚を申しこんだことがありました。父のプリアモスは和平のために役立つ、と乗り気でしたが、ヘクトルが反対したためにこれは破談になりました。しかしアキレウスは諦めきれずに、ときどき彼女のもとへ通っていたのです。それもパリスの手引きで。アキレウスが踵を狙われてパリスの矢に討たれたときも、このポリュクセネとの逢引に出かけてのことだった、と言われていました。だから戦争終結後、ギリシア人は彼女をアキレウスの墓に連れて行き「死んで墓守をしろ」とその咽喉をかき切ったのです。

ヘカベは戦利品としてオデュッセウスに与えられたと言われていますが、オ

デュッセウスは帰りの船が難破して漂流生活にはいつてしまうので、彼女がどうなったかはわかりません。他の説では、盲目にされたポリュメストルの呪いによって炎の目をした牝犬に変えられた、とされています。カッサンドラは母親がトロイアの地で命を終えると预言していますから、こちらの説の方が正しいように思われます。

ヘクトルの末亡人アンドロマケは、アキレウスの息子ネオプトレマイオス(別名ピュロス)に与えられ、ギリシアに連れて行かれます。その後の彼女の心境は、17世紀フランス古典悲劇を代表するジャン・ラシーヌ(1639－1699)が、不朽の名作『アンドロマック』のなかでヒロイン自身に切々と語らせていますが、トロイアを陥つまえに彼女の味わった苦しみは『トロイアの女』に明らかです。

ヘカベのもとにポリュクセネの最期を告げに来たアンドロマケが、ともに不運を嘆いているところへ、ギリシア人の使者が凶報を伝えにやって来ます。

「ギリシア軍の会議で、ご子息の死刑が決まりました。トロイアの城壁から突き落とせ、と」

母親の絶叫におびえて、幼いアステュアナクスはそのとき、雛が母鳥の羽にかくれるように、アンドロマケの着物の裾にしがみつきました。

「さあ、その子をこちらにお渡しなさい。国も夫もすでになく、そなたは囚われの身、ひとりでどうしてわれわれに刃向かうことができよう。おとなしくその子を渡せば、遺骸は返して差し上げる。ギリシアの兵士たちを怒らせれば、このお子は吊いすらしてはもらえないのですぞ」

アンドロマケはひしとわが子を抱きしめました。

「ああ、いつまでもこうして抱いていたい。このいとし肌を嗅いでいたい。乳房をふくませて育てた甲斐もなく、おまえは目もくらむ高みから、無残にも突き落とされて、死ななくてはならないのよ。お父さまはもう土のなかから、あの名高い槍を取って、おまえを救いに来てはくださらない。トロイアのお国が亡びてしまったのだもの。名にし負うトロイアの沃野が、荒れ果ててしまったのだもの。」

さあ、どうしてもというなら、この子を連れていって投げ落とすがよい。そしてこの子の肉を喰らうがよい。わたしを早く船にのせて、この惨めな姿をかくしておくれ。子を奪われ、夫を殺めた人の倅とのめでたい婚礼に向かうこのわたしを」

やがて城壁から落ちて亡骸^{なきがら}となった幼児がヘクトルの盾に乗せられて運ばれて来たとき、アンドロマケはすでに海上にありました。亡骸^{あや}を受け取って、野辺の送りの装束を着せてやったのは、祖母のヘカベでした。

それより早く、アガメムノンの妾とされたカッサンドラは乗船に際して、わけのわからないことを口走っていました。

「さあ、さっさとわたしを連れてお行き、婿どのと地獄で婚礼をあげさせるために。ギリシア軍の総大将として、並ぶ者なしとみずから思っていたそのお人が、世にも哀れな葬られ方をするのだから。それも昼をさけて、ことさら暗い闇夜に。そしてわたしの体は着物まで剥ぎ取られ、婿どのお墓のかたわら、谷川の水のほとばしるほとりに捨てられて野獣の餌食にされるのだから」

それは彼女がアガメムノンの妻のクリュタイムネストラに殺されること、アガメムノン自身も妻に謀殺されることを予言し、その埋葬の有様を正確に叙述していたのですが、並み居る人々の誰ひとりとして、それを理解するものはいなかったのです。

◇ キー・ワード「運命」について

さて、私の「ギリシア神話の世界」についてのお話は、これでおしまいです。さいごに、この世界を貫く思想をひと言で要約するなら、どんな言葉が相応しいかを言って、結びとしたいと思います。

それは「運命」という言葉です。

ギリシア神話に登場するたくさんの神々、人間たちの誰ひとりとして「運命」に左右されない者はありません。ゼウスでさえも、ひとたび口にした「運命」を変えることはできないのです。「運命」を逃れるための旅が逆に彼を「運命」に

呼び寄せることになったオイディプス王、「運命」を知るがゆえにそれに対する徹底的な無力さをも知らなければならない宿命の予言者カッサンドラ、その他多くの例が、このことを示していたと思います。

しかし、「ギリシア神話」の登場人物たちに、「運命」だから、と言って無気力におちいり、努力を怠るような者が見当たらないことも事実です。「運命」とは彼らにとって、それに従うものであるよりはむしろ、乗り越えるべきものとして彼らのまえにたちはだかるのです。力を尽くしてこれと格闘することが、彼らの「運命」を作って行くのです。

「ギリシア神話」における「運命」とは、「自分自身」のことなのではないでしょうか。

あ と が き

講義用のノートをもとにして本を書こう、という思いはかなり以前から温めていたのですが、実際に取り掛かったのは2002年の春のことです。以来2年の歳月を費やすうち長年勤めた大学を退き、執筆に専念してようやく世に送り出すときを迎えました。

講義をしているあいだには気づかなかったことを、書いていくうちにたくさん学ぶことができました。その中でももっとも大きな事柄、書いている私自身驚きとともに知ったのは、西暦紀元1世紀という時代の重要さでした。

「ギリシア神話の世界」が「新約聖書の世界」に変貌する、その端緒となるのがこの時代です。それは言うまでもなくイエス・キリストの誕生によって起こるのですが、物理的にはローマ帝国がその土壌となります。ナザレからエルサレムへ、エルサレムからローマへ、そして世界へ、という構図。インターネットも飛行機もない時代、「福音」という名の新思想は思想そのものの持つ力によって海を渡り、山を越え、人の心を変えて行くのですが、そこにローマ文明というものが果たした役割を無視するわけには行きません。オリュンポスの神々の後裔が築いた高度な文明と文化は、中東の僻地から湧き出した水を大河に、そして大海に運び入れる役割を果たすのです。

そのとき、太祖アブラハムの父テラが南メソポタミアのウルに現れてから数えて2000年の年月が経っていました。振り返って現代という時代に目をやれば、キリスト生誕以来、同じだけの時間が経過したことに気づきます。

キリスト教を原動力として生まれたヨーロッパ文明がようやく行き詰まりを見せる昨今、世を変え、人間を変える次の2000年を創る思想は、地球のどこに、どのようにして生まれているのでしょうか。そしてそれを全人類共有のものとする力を持った文明は誰によって担われることになるのでしょうか……。

次に、この本を書くにあたって私が参考にした文献を挙げ、著者の方々に感謝の意を表したく思います。きわめて初歩的な事柄から学ばなければならなかった私の経験は、これからこれらの世界に近づこうとする方々にも通じるものと思いますので。

〔 3つの世界にわたって 〕

1. 『世界史年表』 河出書房新社 1992 改訂新版
2. 『世界史年表・地図』 吉川弘文館 2003 9版
3. 『新世紀百科辞典』 学習研究社 1978 初版2刷
* 人名等の表記は本書に拠っている。
4. 『世界文化史年表』 芸心社 1990 2刷
5. 『物語 世界史への旅』 山川出版社 1993 1版17刷

〔ギリシア神話の世界〕

1. 高津春繁『ギリシア神話』 岩波新書 1976 18刷
2. 呉 茂一『ギリシア神話 上・下』 岩波文庫 1979 2刷
3. 『ギリシア・ローマ神話文化事典』 原書房 1997
4. 『ギリシア・ローマ神話事典』 大修館書店 1999 9版
* 人名等の表記は本書に拠っている。
5. オウィディウス『転身物語』 田中秀央・前田敬作訳 人文書院 1980 2刷
6. 吉田敦彦『ギリシア・ローマ神話——人間に似た神様たち——』
世界の神話 3 筑摩書房 1996 15刷
7. 加藤邦宏『ギリシア神話物語——神々と英雄たちの50のエピソード』
8. アンドレ・ボナール『ギリシアの神々』 戸張智雄・戸張規子訳 人文書院
1984
9. 阿刀田 高『ギリシア神話を知っていますか』 新潮文庫 2000 42刷

〔旧約聖書の世界〕

1. 『聖書』 新共同訳 日本聖書協会 1987
* 人名等の表記は本書に拠っている。
2. 『聖書』 日本聖書協会 1955
3. 『旧約・新約聖書』 ドン・ボスコ社 1964
4. 『聖書』 フェデリコ・バルバロ訳 講談社 1987
5. 『聖書事典』 日本基督教団出版局 1986 29版
6. 『旧約・新約 聖書大事典』 教文館 2001 3版
7. フェデリコ・バルバロ『旧約聖書の世界』 講談社 1987
8. 池田 裕『旧約聖書の世界』 岩波現代文庫（文芸 34） 2001
9. 大島 力『旧約聖書と現代』 NHK ライブラリー 127 2000
10. 木田献一『旧約聖書の概説』 リトン 1995
11. マックス・I・ディモン『ユダヤ人——神と歴史のはざままで——』
上巻 藤本和子訳 朝日選書 1991 10刷
12. ウォルター・ワングリン『小説 聖書』 旧訳篇 仲村明子訳 徳間書店
1998 12刷
13. 阿刀田 高『旧約聖書を知っていますか』 新潮文庫 1998 8刷
14. 谷口江里也『旧約聖書物語』（G・ドレ挿画） アルケミア 1997
15. 『70人訳ギリシア語聖書 I 創世記』 秦 剛平訳 河出書房新社 2002
16. 《Le Livre de la Bible-L'Ancien Testament》 Edition Gallimard 1985

〔新約聖書の世界〕

1. 〔旧約聖書の世界〕の1.
2. 〔 同 〕の2.
3. 〔 同 〕の3.
4. 〔 同 〕の4.
5. 〔 同 〕の5.
6. 〔 同 〕の6.

7. 『新約聖書』 フェデリコ・バルバロ訳 講談社 1987
8. フェデリコ・バルバロ『福音書の世界』 講談社 1987
9. フェデリコ・バルバロ『合併福音書』 ドン・ボスコ社 1961
10. 『ヨーロッパ キリスト教史 I』 中央出版社 1970
11. 加藤 隆『新約聖書の誕生』 講談社選書メチエ 1999
12. ウォルター・ワングリン『小説 聖書』 新約篇 仲村明子訳 徳間書店
1998 11刷
13. 阿刀田 高『新約聖書を知っていますか』 新潮文庫 2000 7刷
14. 谷口江里也『新約聖書物語』 (G・ドレ挿画) アルケミア 1997
15. 《Le Livre de la Bible-Le Nouveau Testament》Edition Gallimard 1985
16. ガエタノ・コンプリ『キリストの光を』 ドン・ボスコ社 1989

ほかにもたくさんの有益な書物がありますが、ここには直接本書の内容に関して学ぶことのできたもののみを挙げました。とりわけ、青春期の私に『聖書』の読み方を教えてくださったカトリック版口語訳『聖書』の著者故フェデリコ・バルバロ師に、きわめて多くの教示を得たことを記します。

なお、『聖書』からの引用はかならずしも上記文献の訳文をそのまま採用したものではなく、私の個人的な読み方によるところが大きいことをお断り致します。

最後になりましたが、この本の企画を即座に取り上げてくださった青山社社長池田雅弘氏、著者の意図を汲んでこのように読みやすい美しい本に仕上げてくださった担当の野下弘子氏に、厚くお礼申し上げたいと思います。

2004年1月7日 初校を終えて

著 者

【著者紹介】

中島 公子 (なかじま こうこ)

1932年東京生れ。早稲田大学大学院博士課程（フランス文学）終了。
元明治大学農学部教授。

◇ 著書

『スタンダード・フランス語講座』第8巻「文学鑑賞」大修館書店（共著）

『文芸人間学の試み——日本近代文学考——』近代文芸社

『My Lost Childhood』（現代日本の短編作家シリーズ19）近代文芸社

◇ 訳書

エルヴェ・ルソー『キリスト教思想』文庫クセジュ 白水社

フランソワ・モーリヤック『愛の砂漠』角川文庫（共訳）

〃 『蜷のからみあい』春秋社

〃 『海への道』春秋社

フランソワーズ・マレ＝ジョリス『夜の三つの年齢』白水社

ジュリアン・グラック『半島』白水社（共訳）

リヨネル・ジャンドロ『すばらしい誕生の物語』女子パウロ会（共訳）

ジャン＝マリ・モレッティ『いのちはだれのもの』女子パウロ会 ほかに多数

お話 文芸思潮 ― ヨーロッパ文化の源泉 ―

2004年3月30日 第1刷発行

著 者 中島 公子

発行者 池上 淳

発行所 〒229-1124 神奈川県相模原市田名11240

アメニティタワー5F

学術図書
出版 (株) 青山社

TEL 042-763-6440(代) FAX 042-763-6443

URL <http://www.seizansha.co.jp/>

振替口座 00200-6-28265 ISBN 4-88359-109-3

印刷・製本 青史堂印刷

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

Printed in Japan 2004

ISBN4-88359-109-3 C1000 ¥3000E

定価（本体価格3,000円＋税）